

いわき明星大学 第1回 FD研修会報告書

日時 : 平成21年9月8日(火) 9:30~19:40

場所 : いわき明星大学 薬学部棟
教員談話室(懇親会)

主催 : いわき明星大学
いわき明星大学FD委員会
いわき明星大学教育改革推進準備室

- 組織
- (1) ディレクター : 関口 武司 学長
 - (2) 実行委員長 : 田中 晴雄 副学長
 - (3) 実行委員 : 安野 拓也, 佐々木 秀明, 森 丈弓, 鈴木 政雄,
片寄 みつほ, 宮腰 俊行
 - (4) タスクフォース : 竹中 久, 石丸 純一, 山崎 洋次, 竹内 良亘, 橋本 眞也,
安野 拓也, 佐々木 秀明, 青山 照男, 福田 幸夫,
森 丈弓, 鈴木 政雄

いわき明星大学第1回FD研修会 報告書 目次

1. 「いわき明星大学 第1回FD研修会の開催について」
(ディレクター) 関口 武司 学長・・・P. 3
2. 「第1回FD研修会を終って」
(実行委員長) 田中 晴雄 副学長・・・P. 4
3. FD研修会概要・・・P. 5
4. 基調講演「我が国の大学の致命的欠陥」
諸星 裕 先生 (桜美林大学・大学院教授)・・・P. 10
5. キックオフ・レクチャー 1「医療系教育におけるカリキュラム立案法」
山崎 洋次 先生 (いわき明星大学・薬学部教授)・・・P. 13
6. キックオフ・レクチャー 2「シラバスとは？」
諸星 裕 先生 (桜美林大学・大学院教授)・・・P. 19
7. 課題1に関する報告 (A～Eグループ)・・・P. 20
8. 課題2に関する報告 (F～Mグループ)・・・P. 30
9. FD研修会に参加しての感想・・・P. 47
- ※ 冒頭に「諸星裕先生 (基調講演講師) からのコメント」
10. アンケート結果・・・P. 84
11. 懇親会・・・P. 91

いわき明星大学 第1回FD研修会の開催について

学長 関口 武司

このたび企画しましたFD研修会へ多数の教職員の皆様にご参加いただきまして、誠にありがとうございました。

ご存じのように、「教員が授業内容・方法を改善し向上させるための組織的な取り組み」であるFDの実施が各大学に義務化され、平成18年度の実施率は約9割に達しているとのこと。一方、平成20年12月の中央教育審議会総会で、「学士課程教育の構築に向けて」の答申が取りまとめられ、この中でFDの取り組みは普及したが、教育力向上に十分につながっておらず、その実質化が必要と指摘し、FDについて一方向の講義だけに偏るのではなく、双方向的なワークショップ、教員相互の授業参観や相互評価などを積極的に取り入れるよう提言しています。



この提言に沿った本学のFD研修について、教育改革推進準備室とFD委員会に検討していただいた結果、本学では初めての試みとして、丸1日を費やした全学的で組織的なFD研修会を実施する運びとなりました。桜美林大学大学院教授の諸星裕先生の「我が国の大学の致命的欠陥」と題した基調講演では、大学教育の問題点などを具体的に示していただきました。午後には、「本学へのニーズ確認と対策」と「科目設計」についてグループ討論を行っていただきました。

研修会に参加した先生方は当初緊張している様子でしたが、グループ討論が終わるとすっかり緊張が解けて研修の場が大変和やかな雰囲気変わったと強く感じました。グループ討論における率直な意見交換を通して先生方の意思疎通が図られたのではないかと、このことだけでも、今回のような形式の研修を実施した意義があったと判断しています。諸星先生は本学に対する印象として「貴学は確かに現象面では不安材料が多いと思います。しかしながら、飛躍の可能性はとてつもなく多くあると確信しました。」と述べておられました。今回の研修会が本学における学士課程教育の改善・充実に学部を超え教職員が一体となって取り組んでいく新たな出発点となり、本学が大きく飛躍する契機となることを期待します。

最後になりましたが、短期間に実りのあるFD研修会を立案・実施していただいた教育改革推進準備室とFD委員会の皆様および資料作成などの準備に大変ご協力をいただきました職員の皆様に対して改めて敬意を表すとともにその労に感謝いたします。

以上

第1回FD研修会を終って

第1回FD研修会 実行委員長 田中 晴雄

諸星先生の基調講演、山崎（洋）先生のキックオフ・レクチャーに続いて、課題1及び2についてのSGDを含むいわき明星大学全教員による第1回FD研修会を無事終了できたことは、本学にとって画期的な出来事でした。この成功は、教育改革推進準備室とFD委員会の各メンバーの努力及び参加された全教員と準備を担当された職員の協力によるものであり、心から感謝します。又、本研修会開催前の8月初めに山形大学主催の他大学にも開放されたFD研修会に学長と3学部長と共に参加して経験を積んだことも成功の要因に挙げることができます。



薬学部では平成20年度に全教員を対象とした（非常勤講師3名を含む）3回のFD研修会を実施していましたが、科学技術学部と人文学部の教員にとってはFDフォーラムに参加したことはあるものの全教員参加の組織的なFD研修会は初めてのものでした。

諸星先生の「日本の大学の致命的欠陥」と題する講演は、そのほとんどが取りも直さず本学の弱点を指摘するものであり、大変新鮮で強烈な印象を持って迎えられました。後半のSGDは他学部の教員との交流という点で高い評価を受けましたが、時間不足等の問題点の指摘もありました。今後のFD活動の在り方の検討における参考にしたいと思います。

日本はいよいよ少子化時代を迎えて私立大学の半分近くが定員割れで、さらに少子化が進む10年後・20年後にはかなりの数の私立大学が募集を停止せざるを得なくなるであろうとの予測があります。しかも、日本の4年間の大学教育の内容はアメリカの大学では半年で終了すると言われていています。まさに日本の大学教育は崩壊寸前であり、「幕末」の状態にあり、「明治維新」のような大改革を起こさなければ日本の将来を担う若者を育てる教育は実現しないとも考えられています。いわき明星大学は、地域に貢献することにより牽いては日本と世界のさらなる発展に貢献できる若者を育てるためにどうすれば良いかを今こそ考え、本学のPDAを確立しなければなりません。それが出来た時に初めて本学が社会に貢献できる大学として、将来に亘って存続できる見通しが見えてくると信じます。今後のFD活動を通してさらなる議論を展開し、いわき明星大学に合致した教育改革を推進しようではありませんか。

最後に、報告書作成に大変なご尽力を頂いた職員の方々に感謝の意を表します。

以上

3. FD研修会概要

スケジュール

時間	タイトル/内容	場所	備考
9:00~9:30	受付	16-105 前	
9:30~9:40	学長挨拶 関口 武司 先生	16-105	
9:40~9:45	実行委員長挨拶 田中 晴雄 先生	16-105	
9:45~11:15	基調講演： 「我が国の大学の致命的欠陥」 諸星 裕 先生	16-105	司会 田中 晴雄 先生
11:15~11:45	キックオフ・レクチャー1： 「医療系教育におけるカリキュラム立案 法」 山崎 洋次 先生	16-105	
昼 食（各グループ討論会場）			
12:45~13:30	キックオフ・レクチャー2： 「シラバスの意義と作成法」 諸星 裕 先生	16-105	司会 田中 晴雄 先生
13:30~13:50	説明：研修の進め方 実行委員長	16-105	
13:55~15:35	グループ討論 課題1（A～Eグループ） 課題2（F～Kグループ）	P. 7-8 参照	
休 憩			
15:45~17:40	グループ発表： 各グループでの成果を発表	16-105	司会 安野 拓也 先生
17:40~18:00	全体講評・修了証の授与	16-105	司会 田中 晴雄 先生
18:10~19:40	懇親会	教員談話室	

【留意事項】

- (1) 研修中の個人の呼称は、「〇〇さん」とします。
- (2) 昼食は、グループ討論の会場に用意しますので、そちらで済ませて下さい。
- (3) 研修中は仕事を忘れ、研修に集中してください。
- (4) 携帯の電源は、休憩時間を除き、OFFとして下さい。
- (5) 研修は、カジュアルな服装で参加して下さい。
- (6) 懇親会は、車の方が多くと思いますので、軽食、ソフトドリンクを準備いたします。
- (7) 受付は、午前9:00から16-105教室前で行います。
- (8) 筆記用具を持参してください。

(追加研修スケジュール)

時間	タイトル/内容	備考
13:00~13:02	学長挨拶 関口 武司 先生	
13:02~13:05	実行委員長挨拶 田中 晴雄 先生	
13:05~15:00	基調講演： 「我が国の大学の致命的欠陥」 諸星 裕 先生	DVD研修
15:00~15:25	キックオフ・レクチャー1： 「医療系教育におけるカリキュラム立案法」 山崎 洋次 先生	DVD研修
休憩 (10分)		
15:35~16:10	キックオフ・レクチャー2： 「シラバスの意義と作成法」 諸星 裕 先生	DVD研修
16:10~16:12	説明：研修の進め方 鈴木 政雄 先生	
16:12~17:25	グループ討論 課題2 (L~Mグループ)	
17:25~17:35	グループ発表	
17:35~17:40	全体講評・修了証の授与	

【追加研修 (第1回)】

1. 日時：平成21年10月5日 (月)
2. 場所：2-105、教員談話室

【追加研修 (第2回)】

1. 日時：平成21年10月7日 (水)
2. 場所：本館 教員談話室

グループ別参加者

Aグループ 16-202

電子情報学科	高山 文雄
システムデザイン工学科	田中 勝之
表現文化学科	大内 和子
現代社会学科	菊池 真弓
薬学科	片桐 拓也
薬学科	佐藤 陽
薬学科	松本 司
生命環境学科	佐々木秀明

Bグループ 16-203

生命環境学科	鈴木 薫
表現文化学科	奥村 賢
現代社会学科	大橋 保明
薬学科	中越 元子
薬学科	富岡 節子
薬学科	山崎 直毅
薬学科	吉田 君成
薬学科	山崎 洋次

Cグループ 16-204

電子情報学科	大表 良一
表現文化学科	斎藤 正昭
現代社会学科	茨木 竹二
心理学科	糟谷知香江
薬学科	竹中 章郎
薬学科	野原 幸男
薬学科	山浦 政則
システムデザイン工学科	橋本 眞也

Dグループ 16-205

電子情報学科	清水 文直
表現文化学科	能地 克宜
現代社会学科	井澤 直也
心理学科	窪田 文子
薬学科	黒見 坦
薬学科	土原 和子
薬学科	林 正彦
システムデザイン工学科	安野 拓也

Eグループ 16-206

電子情報学科	中尾 剛
生命環境学科	江尻陽三郎
現代社会学科	菅野 昌史
心理学科	田多 香代子
薬学科	倉澤 嘉久
薬学科	高橋 淳
薬学科	吉川 真一
表現文化学科	青山 照男

Fグループ 16-211

電子情報学科	中田 芳幸
生命環境学科	岩田 恵理
現代社会学科	土田 節子
心理学科	末次 晃
薬学科	岩下 新太郎
薬学科	蝦名 敬一
薬学科	永田 隆之
現代社会学科	石丸 純一

Gグループ 16-111

システムデザイン工学科	桜井 俊明
生命環境学科	楊 仕元
表現文化学科	今泉 瑞枝
心理学科	富田 新
薬学科	江藤 忠洋
薬学科	菊池 雄士
薬学科	櫻井 映子
現代社会学科	福田 幸夫

Hグループ 16-313

システムデザイン工学科	東 之弘
表現文化学科	仲村渠 哲勝
現代社会学科	鎌田真理子
心理学科	本多 明生
薬学科	鹿児島 正豊
薬学科	角田 大
薬学科	村田 亮
電子情報学科	竹内 良亘

Iグループ 16-316

生命環境学科	佐藤 健二
現代社会学科	叢 小榕
心理学科	大原 貴弘
薬学科	金 容必
薬学科	久保 博昭
薬学科	村田 和子
薬学科	鈴木 政雄

Jグループ 16-319

システムデザイン工学科	高橋 義考
生命環境学科	吉田 喜孝
表現文化学科	大橋 純一
現代社会学科	神山 敬章
薬学科	川口 基一郎
薬学科	櫻井 ルミ子
薬学科	佐藤 直記
心理学科	森 丈弓

Kグループ 16-322

システムデザイン工学科	高 三徳
生命環境学科	梅村 一之
現代社会学科	五十嵐幸一
心理学科	林 洋一
薬学科	大林 尚美
薬学科	丸山 博文
薬学科	吉田 進
電子情報学科	竹中 久

タスクフォース

【追加研修】

Lグループ 教員談話室

電子情報学科	坂本 直道
システムデザイン工学科	清水 信行
現代社会学科	上野 直紀
心理学科	吉川 吉美
薬学科	板倉 敦子
生命環境学科	佐々木秀明

Mグループ 教員談話室

表現文化学科	上野 俊一
表現文化学科	小池 久恵
表現文化学科	佐藤 一昭
現代社会学科	高木 竜輔
現代社会学科	柳澤 孝主
心理学科	福島 朋子
薬学科	鈴木 政雄

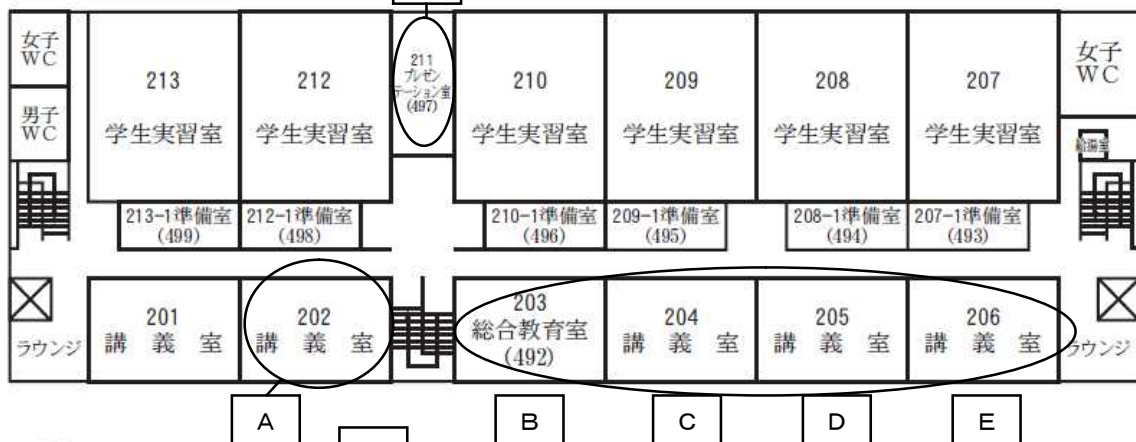
グループ討論 会場

グループ	会場	グループ	会場
Aグループ	16-202 (講義室)	Gグループ	16-111 (模擬病室)
Bグループ	16-203 (総合教育室)	Hグループ	16-313 (セミナー室)
Cグループ	16-204 (講義室)	Iグループ	16-316 (セミナー室)
Dグループ	16-205 (講義室)	Jグループ	16-319 (セミナー室)
Eグループ	16-206 (講義室)	Kグループ	16-322 (セミナー室)
Fグループ	16-211 (プレゼン室)		

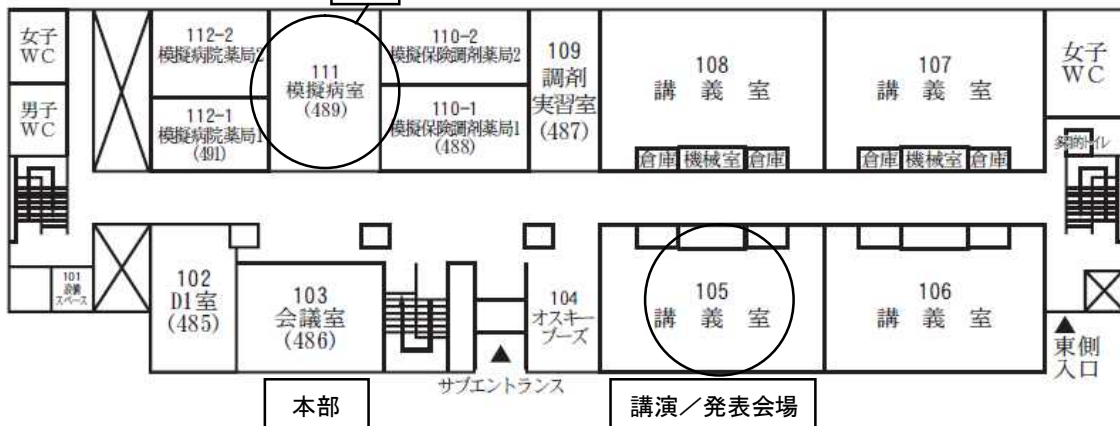
3F



2F



1F



研修の進め方

(1) グループ討論

- ・参加者を大きく二つのグループに分け、A～Eグループは課題1について、F～Kグループは課題2について討論し、各グループの討論の成果を発表する。

課題1 「いわき明星大学へのニーズとは何かそして、その対策は？」(A～Eグループ)

課題2 「科目設計：適切なシラバスの作成」(F～Kグループ)

F, Gグループ：地域性と関連する授業：大学と地域の連携

H, Iグループ：21世紀の諸課題に対応する授業

J, Kグループ：職業意識と労働意欲を培う授業

- ・グループ毎に司会者、記録係、パソコン入力者、発表者を置き、グループ討論を進める。
- ・記録係は、討論の内容と成果を記録し、下記の要領でグループ報告書を作成して提出する。
- ・パソコン入力者はPowerPointで、各グループの発表用スライドを作成する。
発表用スライドは、USBメモリーに保存して、発表の前に16-105の発表用パソコンに移す。

(2) 発表

進 行 : 安野 拓也 先生

タイムキーパー : 佐々木 秀明 先生

各グループの発表者は、発表用スライドを用いてグループを代表して発表する。

(発表 5分, 討論 3分) ※発表順は当日決定

発表スケジュール :	1	15 : 45～16 : 53	___グループ	}	課題1 : A～Eグループ
	2	15 : 54～16 : 02	___グループ		
	3	16 : 03～16 : 11	___グループ		
	4	16 : 12～16 : 20	___グループ		
	5	16 : 21～16 : 29	___グループ		
		16 : 30～16 : 40	課題に関する総合討論		
	6	16 : 41～16 : 49	___グループ	}	課題2 : F～Kグループ
	7	16 : 50～16 : 58	___グループ		
	8	16 : 59～17 : 07	___グループ		
	9	17 : 08～17 : 16	___グループ		
	10	17 : 17～17 : 25	___グループ		
	11	17 : 26～17 : 34	___グループ		
		17 : 35～17 : 40	課題に関する総合討論		

4. 基調講演



講演者： 諸星 裕 先生

1

我が国の大学の致命的欠陥

at
いわき明星大学

桜美林大学・大学院教授
諸星 裕

2

ミッションの欠如

- いったいこの大学は何をすところなのか？
- ミッションに沿ってカリキュラムは編成されているか
- カリキュラムに沿って教員は雇われているか
- 外部によるミッションの点検、評価は？
- ミッションは変化しているか？

3

学部教授会の職責とその弊害

- 学校教育法95条
- Collective Decision Making
- 学部間の壁
- 学生の自由な勉学環境を不可能にしている
- 大学マネジメントとの乖離

4

教員のAccountability

- 大学教員は何をする職業か？
- 教育(人にもものを教えることを習ったのか？)
- 研究
- 学生の成長に貢献
- 大学及び外の社会への貢献
- 上記4点のバランスは誰が決めるか？
- 有名無実の教員評価

5

職員の専門性の欠如

- 終身雇用制・Generalist vs. Specialist
- 専門性の低さに起因する従属的關係

6

マネージメントの欠如

- 経営vsAcademic Management
- 学部長によるマネージメント

1

学外との隔離、閉鎖性

- 大学はコミュニティーのアセットである
- 他の教育機関との連携
- ミッションに即した地域との関係、貢献
- 産業界との連携

2

システムの欠如

- 大学の管理体制/組織の未熟さ
- 教員評価の欠如
- 大学というコミュニティーを把握できていない
(卒業生、地域社会、産業界、)
- 大学の産物は単位である—単位制授業料
- F.T.E.(Full Time Equivalent)
- アドバイザー制度、G.P.A.

3

• GPAの計算例

科目	成績	単位	成績点	GP
口語表現 (1単位)	A	1	4.0	= 4.0
英語 I (4単位)	B	4	3.0	=12.0
情報科学 (2単位)	B	2	3.0	= 6.0
宗教学 (2単位)	A	2	4.0	= 8.0
心理学 (4単位)	C	4	2.0	= 8.0
調査研究法 (2単位)	D	2	1.0	= 2.0
家族社会学 (4単位)	F	4	0.0	= 0.0
テニス (1単位)	B	1	3.0	= 3.0

$$\text{GPA} = \frac{43.0}{20} = 2.15$$

履修合計単位数 20単位 修得単位数 16単位

4

履修登録単位数の上限の変動

- GPA3.5以上 →次学期**28単位**まで
- 基準単位 20単位/セメスター
- GPA3.0以上 →次学期**24単位**まで
- GPA2.0**未**満 →次学期**16単位**まで
- (2学期継続で保護者呼び出し、3学期継続で退学勧告)

5

GPAの用途(例)

- 学修の進歩・到達状況をモニター
- 学修計画や進路の指針
- 奨学金の給付の基準等
- 自動車保険の料率の積算(米国の例)

6

GPA制度に期待される効果

- 学生の意識高揚
単位の数より学習の質
履修責任
- 教育内容の向上
学生からのチェック
FDに活用
- 教育施設の有効活用

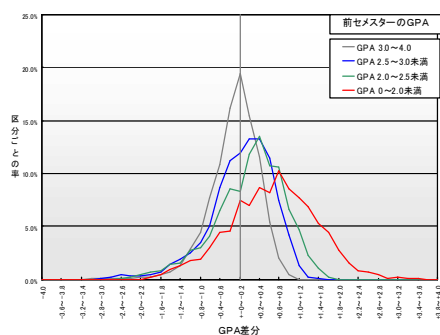
1

GPA制度導入のための必要条件

- セメスター完結型の学期構成
- 学習支援体制の確立
アカデミック・アドバイザー制度
- 単位の実質化

2

次セメスターのGPA変動



3

まとめ

- 大学マネジメントのプロ化
- ミッションの再確認とカリキュラムの再構築
- 学生本位 VS 学問体系本位
- 学生と大学のマッチング
- 教員の職責の確立と評価
- 社会との距離の再定義

4

ご清聴有難うございました。

諸星 裕

5



6

5. キックオフ・レクチャー1

講演者： 山崎 洋次 先生

1

薬学部 山崎洋次

医療系教育におけるカリキュラム立案法

2009/9/8

IMU FD研修会

2

今日、教師を悩ませている問題は、「何を教えるか」よりも、むしろ「いかに教えるか」であり、特に講義一本やりの教育に代わって、実地にどの程度まで教えるか。どの科目を実習教育科目にするか、などといった点である。

ーウィリアム・オスラー博士の母校マギル大学の医学生、教職員のための特別講演（1899年9月）からー



2009/9/8

IMU FD研修会

3

背景

- 1969年：日本医学教育学会の創立
 - 全国医学部長病院長会議の賛同のもとに、牛場大蔵氏(初代会長)を中心として創立された。
- 1970年：戦後初めて、医科大学（医学部）が創設された。
- 1974年：「一県一医大」構想
- 1974年：医学教育者のためのワークショップ（富士研ワークショップ）開催
- 2001年：医学ならびに歯学教育モデル・コアカリキュラムの策定。
- 2002年：薬学教育モデル・コアカリキュラムの策定。

2009/9/8

IMU FD研修会

4

富士研ワークショップ

- WHOが医療・医学の発展のために、Teacher Training (TT) 構想を打ち出し、西太平洋地域におけるRTTC (Regional Teacher Training Center) が1973年に開催したワークショップ (Workshop for Deans and Educational Leaders) にわが国から牛場大蔵、館 正知、日野原重明らが参加。
- 翌1974年12月に牛場らが中心になって、「医学教育者のためのワークショップ」が富士教育研修所（静岡市裾野市）において開かれた（富士研ワークショップ）。
- 第6回から厚生省・文部省の主催のもとに、日本医学教育学会・医学教育振興財団の協力、WHOの後援を受け、5泊6日の日程で行なわれている。

2009/9/8

IMU FD研修会

5



2009/9/8

IMU FD研修会

6

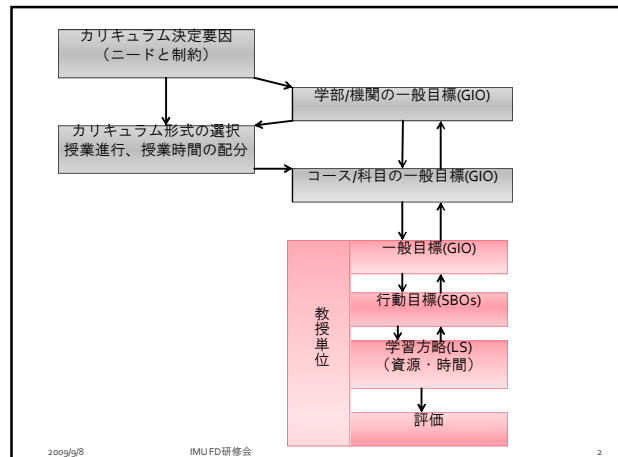
カリキュラムに含まれるもの

- 教授目標(Instructional Objectives)
 - 一般目標(General Instructional Objectives: GIO)
 - 行動目標(Specific Behavioral Objectives: SBO)
- 学習方略(Learning Strategies: LS)
- 教育資源(Resources: R)
- 評価方法(Evaluation Methods)

2009/9/8

IMU FD研修会

1



2009/9/8

IMU FD研修会

2

教育目標分類学Taxonomy

- **知** 認知領域 cognitive domain
 - 想起・解釈・問題解決
- **情** 情意領域 affective domain
 - 態度・習慣
- **技** 精神運動領域 psychomotor domain
 - 技能

2009/9/8

IMU FD研修会

3

一般目標GIO

- 全課程なり、1つの学科なり、1つの教授単位なりを終了した学習者が、何をできるようになるか、総括的に記述したもの。
- 複雑な概念をもつ動詞、または総括的な概念をもつ動詞を用いて表す。
- 【例】(学生は、) 尿路感染症患者の診断と治療ができるようになるために、この疾患の微生物的特性を理解する。

2009/9/8

IMU FD研修会

4

一般目標記述のための動詞の例

知る	認識する	理解する
感ずる	判断する	価値を認める
評価する	位置づける	考察する
使用する	実施する	適用する
示す	創造する	身につける

2009/9/8

IMU FD研修会

5

行動目標SBOs

- 学習者が一般目標に到達するためには、何ができるようにしなければいけませんが、具体的に、個別的に、観察可能な行動を示す動詞を含んで書かれているもの。
- 行動目標を測定することによって、教授単位の一般目標を達成したかどうかを間接的に評価する。
- 【例】
 - 尿路感染症の起炎菌の種類を頻度別に列記できる。
 - 尿路感染症の起こりやすい状態を列挙し、説明できる。
 - 尿路感染の経路を述べることができる。
 - -----選択できる。
 - -----判定できる。

2009/9/8

IMU FD研修会

6

行動目標記述のための動詞の例

- 認知領域（想起・解釈・問題解決）
 - 列記（挙）する 述べる 記述する 説明する 分類する 選択する 弁（識）別する 使用する 応用する 演繹する 批判する
- 情意領域（態度）
 - 行う 尋ねる 助ける 寄与する 強調する 表現する 始める 参加する 反応する
- 精神運動領域（技能）
 - 感ずる 模倣する 熟練する 実施する 創造する 注射する 操作する 測定する

2009/9/8

IMU FD研修会

1

水晶玉占いをしていないか？



2009/9/8

IMU FD研修会

2

良い測定のための条件①

- 妥当性 validity
 - 測定しようとするものを測定しているかどうかの正確さの程度。ものの長さをはかるのに、重さをはかる「はかり」ではかかってはいないこと。
- 信頼性 reliability
 - 再現性のある結果を提供しているかということ。ものの長さをはかるのに検定された「ものさし」ではかかっているかということ。

2009/9/8

IMU FD研修会

3

良い測定のための条件②

- 実用性 usability、効率 efficiency
 - 採点が容易で、結果の解釈が容易であること。
- 特異性 specificity
 - なぜ、この解答を選んだかということ。形成的評価においては重要。

2009/9/8

IMU FD研修会

4

教育評価の6原則①

- 何を、評価するのか？
 - 学習者（学習法）、教員（教授法）、カリキュラム
- いかなる目的で、
 - 形成的評価 formative evaluation
 - 総括的評価 summative evaluation
- いつ、
 - プリテスト
 - 中間テスト
 - ポストテスト
 - フォローアップテスト

2009/9/8

IMU FD研修会

5

教育評価の6原則②

- だれが、
 - 教員、学習者、教育評価専門家.....
- 評価の具有すべき性格
 - 妥当性、信頼性、客観性、公平性、弁別性、効率性.....
- どのように、
 - 論述試験 essay test
 - 口頭試験 oral examination
 - 客観試験 objective examination
 - 実地試験 practical examination
 - 観察記録 observation record
 - シミュレーションテスト

2009/9/8

IMU FD研修会

6

多肢選択試験MCQ



2009/9/8

IMU FD研修会

1

認知領域のTaxonomy

- Taxonomy I
 - 想起レベル
- Taxonomy II
 - 解釈レベル
- Taxonomy III
 - 問題解決レベル

2009/9/8

IMU FD研修会

2

想起レベルの問題

(例題) ライディヒ細胞はどこに認められるか。

- A. 小脳
- B. 肺
- C. 胃
- D. 精巣
- E. 腎臓

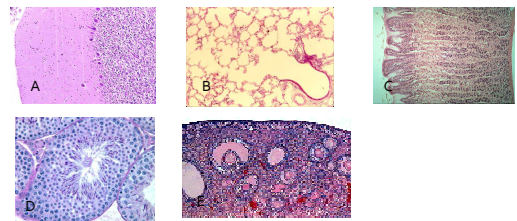
2009/9/8

IMU FD研修会

3

解釈レベルの問題

(例題) ライディヒ細胞はどの組織像に認められるか。



2009/9/8

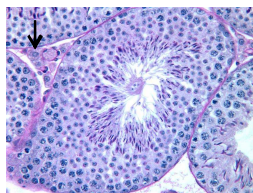
IMU FD研修会

4

問題解決レベルの問題

(例題) 図に示す組織について正しいのはどれか。

- A. 片側性臓器である。
- B. 内胚葉由来である。
- C. 静脈血は門脈に流入する。
- D. 矢印で示される細胞は男性ホルモンを分泌する。
- E. 矢印で示される細胞は精子に栄養を与える。



2009/9/8

IMU FD研修会

5

カリキュラム立案の要諦：RUMBA

- **R**eal
 - カリキュラムが実際に行われること
- **U**nderstandable
 - 学生が理解できること
- **M**easurable
 - 測定（評価）されること
- **B**ehavioral
 - 行動によって示されること
- **A**chievable
 - 到達可能であること

2009/9/8

IMU FD研修会

6

〔例〕 診断学コース，教授単位：問診

〔一般目標〕 患者から正しい情報を引き出し，望ましい医師・患者関係を醸成することができるようになるために，問診に関する基本的知識・態度・技法を身につける。

〔行動目標群〕

- ① 診療における問診の目的を説明できる。
- ② 問診によって採取すべき情報の種類を列挙し，そのおのおのの意義を述べるができる。
- ③ 問診者のとるべき望ましい態度を評価できる。
- ④ 問診における面接技法の基本を説明できる。
- ⑤ 問診を適切な順序で実施できる。
- ⑥ 問診によって採取した情報を，整理して記載できる。

〔学習方略〕

対応する
行動目標

- | | |
|--|------|
| 1) 好ましくない問診場面（複数）のビデオを見て問題点について討議する。 | ①②③ |
| 2) 問診の目的について討議する。 | ① |
| 3) 問診項目についての講義を聴く。 | ② |
| 4) 問診者の望ましい態度についての講義を聴く。 | ③ |
| 5) 問診のテープを聴き，問診者の態度について討議する。 | ③ |
| 6) 問診における面接技法についての講義を聴く。 | ④ |
| 7) 問診についての教科書と参考書を読み，ビデオを見る。 | ①②③④ |
| 8) 教員および学生が患者役となって問診実習を行い，問診のプロセスと技法について，お互いに討議する。 | ⑤ |
| 9) 8) の実習で採取した病歴を整理・記載し（宿題），教員のチェックを受け，記載方法について討議する。 | ⑥ |
| 10) { a) 2人ずつ組んで，慢性疾患入院または外来患者の問診実習を行い，病歴を記載する。各組に3名ずつの患者が割り当てられる。
b) 6人グループで指導医とともに，問診プロセスと記載病歴について討議する。 | ⑤⑥ |

△予算：ビデオテープ作成費	11,000 円
プリント代 7枚 90名分	2,000 円
OHP 用紙 15枚	1,500 円
オーディオテープ 3本	3,000 円
病歴用紙 400枚	2,000 円

合計 19,500 円

△授業進行表：△月△日より△月△日まで毎週土曜午前1, 2時限

	学習方略	使用室
第1週	1) 2)	教室 (全クラス)
	3) 4)	〃 (〃)
第2週	5) 6)	〃 (〃)
	7)	図書館・テレビ視聴室
第3週	1, 2時限	8)
第4週	1, 2時限	9)
第5週	1, 2時限	10)
第6週	1, 2時限	10)
第7週	1, 2時限	10)

使用する部屋	人的資源	物的資源	時間
教室 (大クラス)	内科教員 (1名)	テレビ, VTR 各1台	1.5時間
同上	同上	ビデオテープ	
同上	同上	プリント, OHP	1.5時間
同上	同上	プリント, OHP	
同上	同上	カセットレコーダー	1.5時間
同上	同上	オーディオテープ	
同上	同上	プリント, OHP	1.5時間
{ 図書館	なし	ビデオテープ (3本)	
{ テレビ視聴室			適当時間
小討議室	内科教員 (15名)		3時間
(15人1グループ)			
同上	同上	病歴用紙	3時間
内科病棟・外	{ 内科教員 (15名)	病歴用紙	3時間×3回
来・討議室(15)			
			計 19.5時間

6. キックオフ・レクチャー2

講演者： 諸星 裕 先生

1

シラバスとは？

- カリキュラム管理は誰がする？
- 各科目における教員と学生との間の契約書
- シラバスの構成要件
 - コースの目的
 - 教員の責任とクラスの進め方(具体的なスケジュールを含むこともある)
 - 学生に期待・要求すること
 - 評価の根拠と基準
 - 教員との連絡方法

2



3



4

7. 課題1に関する報告

Aグループ：「いわき明星大学へのニーズとは何かそして、その対策は？」

報告：佐藤 陽

メンバー：

高山文雄
 田中勝之（パソコン入力）
 大内和子
 菊池真弓（司会）
 片桐拓也
 佐藤 陽（記録）
 松本 司（発表）
 佐々木秀明（タスクフォース）



討論内容

1. まず本学へのニーズについて議論した

① 本学に何が求められているか？

A) 社会的ニーズ

- ・若者の高度教育や文化などのレベル向上
- ・地域創生 ・教育の質
- ・社会人再教育の場
- ・地域への貢献 等

B) 学生のニーズ

- ・大学卒業後、きちんと就職したい。
- ・薬剤師等の資格取得
- ・ステータス
- ・なるべく安い生活費（経済的コストの軽減？） 等

② 本学の置かれている状況分析

A) 今ある問題点

- ・外へ出す教育が少ない。

B) 本学の長所と短所（問題点や改革の必要性も含む）

- ・長所：生活費が安い。高大連携等、地域と連携しやすい環境にある。
- ・短所（問題点や改革の必要性も含む）：学生は磨けば光る（潜在能力が潜んでいる子もいる）、閉鎖的（地域から閉ざされた過去がある？）、地元への貢献度が低い、コミュニケーション力が乏しい（就職活動などへの影響） など。

2. 将来への対策案（具体的な行動目標）

① 大学の理念・目標・方略 等

「おらがまちの大学」

- ・誇りを持てるような大学
 - ・社会人基礎力を上げる
 - ・プロになって地域を活性化しよう
 - ・地域との連携
 - ・ボランティアの充実
 - ・明星大学（日野）との連携
 - ・地の利を生かした教育
- ② 方略・実行計画
- ☆日野との連携
- ・公開講座の相互連携 ・学生間の交流 ・単位の互換
 - ・教材の相互利用 ・明星人育成センター 等
- ③ 評価：広範なステークホルダー並びにいわき市民による評価委員会設立
- ・地元への就職率を調べる（地元への貢献度を見る）
 - ・いわき市民の大学等に対するアンケート
 - ・卒業生より、満足度や活躍度を追跡調査する
 - ・御意見箱の設置

討論成果

まず、いわき明星大学へのニーズは何かを考えたときに、学生としては卒業後に良いところに就職したい、資格取得したい、在学中は経済的負担をかけたくない等、一方社会的ニーズでは大学がいかに関与できるかであると考えた。しかし、大学が地域に対して過去やや閉鎖的で、地域への貢献度は低いため、これを見直す必要がある。学生は磨けば光る、潜在能力が潜んでいる者がおり、これを上手く引き出す教育の必要性が考えられる。就職活動の面接等で緊張等もあり上手くコミュニケーションが取れない学生もいる。そのためにも、コミュニケーション能力向上など自分に自信を持てるような学生作りも必要である。さらには、本学は地域と連携しやすい環境にあり、社会人再教育の場を設けるなどを通じて地域連携の必要性が考えられる。

大学の理念・目標は、「おらがまちの大学」とした。誇りを持てるような大学、社会人基礎力を上げること、ボランティアを通じて地域貢献、プロになって地域を活性化しよう、また例えば明星大学（日野）と連携することにより、本学生と他校生と交流する等を通じてコミュニケーション能力を上げると共に、自分に自信を持てるような学生を育成できるのではないかと考えた。

評価法としては、広範なステークホルダー並びにいわき市民による評価委員会を設立し、本学卒業生の地元への就職率（地域貢献度）、いわき市民アンケートに基づく大学の改革、卒業生より満足度や活躍度を追跡調査する、また御意見箱を設けるなどにより、おらがまちの大学を作っていくという対策案を考えた。

Bグループ：「いわき明星大学へのニーズとは何かそして、その対策は？」

報告：鈴木 薫

メンバー：

鈴木 薫 (記録)

奥村 賢

大橋保明

中越元子 (司会)

富岡節子

山崎直毅 (発表)

吉田君成 (パソコン入力)

山崎洋次 (タスクフォース)



作業1：本学へのニーズについて次の点から纏める。

① 本学に何が求められているか。

社会的ニーズおよび学生のニーズを含めて、初めにいろいろな視点からグループメンバーが意見を出し合った。以下にその内容を示す。

- ・ 地域の活性化の一端を担うこと
- ・ 地元近隣の人達との意見交換を行う
- ・ 大学の知識や教養を外部の人達と共有する場を設ける
- ・ 在学生の家族への情報を提供する（在学生の情報および大学からのニュースなど）
- ・ 大学門前町としての大学の役割を果たす
- ・ 自宅通学ができるので、経済的に有利である
- ・ 投書箱などを設置し、学生のニーズを集める（薬学部では投書箱を設置している）
- ・ 学生の生活リズムを確立させる
- ・ 学力を向上させる教育として、補習教育を行う
- ・ 高等学校教育の延長である生活指導などを行う
- ・ 学力が高なくても学士の取得が可能である
- ・ 各種の資格が取得できる（薬剤師など）

これらの意見を基に下記1～3の項目に絞り、②と③の項目について議論した。

1. 地域の活性化・・・地元企業・団体との連携、知識、教養の共有（同時に地域に大学を知ってもらう）、地元近隣の人々へ高等教育を受ける機会を広げる
2. 資格取得（学位、免許など）
3. 初年次教育（基礎教育、専門に生きる基礎学力の育成）、質の良い学生の育成（生活指導により常識やマナーを身に付ける）

② 本学の置かれている状況分析

いまある問題点とは何か、本学の長所、短所について議論した。

その結果、長所は、市や企業との産学連携によるプロジェクトが行われていること（菜の花プロジェクト [科学技術学部]）。短所は、大学側からの共同研究などの積極的働きかけのための宣伝や

普及活動が行われていないこと、さらに、いまある問題点として、学生が卒業後の就職について不安を抱いていることなどが挙げられた。

③ 問題点、改革の必要性など

問題点として、産学連携（菜の花プロジェクト）が必ずしも学生の就職に結びつかないこと、通学に時間がかかることや経済的問題もあるが、課外活動があまり活発でないことやコミュニケーション能力の低い学生が増えてきていることなどが挙げられた。

改革の必要性として、初年次からの基礎教育（学習面および生活面）を行う必要があり、現状としては、初年次教育の改善に着手している学部（薬学部ではフレッシューズセミナーを実施している）もあり、他学部でも始めるべきではないかとの意見が出された。

作業2：将来への対策案（具体的な行動目標）

①大学の理念・目標

- ・自覚的に個性的な校風を作り出していく
- ・個性的な大学像（理念・目標、キャッチフレーズ）

建学の精神である和の精神のもと世界に貢献する人を育成すること、また、校訓である健康・真面目・努力などについて、これまでの理念を変える必要はないとの意見が出された。

②方略（考えられるいくつかの方法、実現の可能性）

③実行計画（主な活動、資源、時期、担当、責任、具体的企画書等）

- ・その宣伝・普及の方法（4年計画案）
 - ②、③については、意見をまとめて以下に示す。
- ・若者から見て将来像が見えるようなアピールができないか？
- ・企業の間や卒業生によるセミナーと、その評価をあわせて行う（就職活動の活発化および意欲の向上）
- ・コミュニケーション能力を改善するために、学生個別での対応やコミュニケーションが取れやすいような環境を提供する（教員だけでなく、カウンセラーの先生にも願います）
- ・全学部の学生に対して読む、聴く、考える、書く、話す、マナーといった基本的な社会人としての基礎能力の育成をしっかり行う
- ・初年次教育を行っていることを含め、大学での教育内容を地域にアピールする
- ・学生の表現力を伸ばすために、アドバイザー制を導入して学生への支援を徹底する
- ・若者主体の音楽フェスティバルの様なイベントを本学で開催する
- ・クラブ活動（課外活動）をもっと活発にするよう、指導ならびにその場を設ける

④評価（主な活動、資源、時期、担当、責任、具体的企画書等）

- ・目標が達成できたかどうかを検証する
- ・学生と教員だけでなく、保護者にも成績および生活指導についての評価をしてもらう
- ・学生の成果をファイリングして、形成的な評価をする（ポートフォリオ評価：薬学部では行っている）

（④の評価については、討論時間内で結論は出せず一部案が提案された）

Cグループ：「いわき明星大学へのニーズとは何かそしてその対策は？」

報告：大表良一

メンバー：

大表良一（記録）
 斎藤正昭（発表）
 茨木竹二（司会）
 糟谷知香江
 竹中章郎
 野原幸男（パソコン入力）
 山浦政則
 橋本真也（タスクフォース）



討論内容と成果

討論は、本学に何が求められているか。本学のおかれている状況分析、問題点、改革の必要性を明らかにし、その後将来への対策案の検討と言う順に進めたが、時間的制約のため対策案の実行計画、評価方法までは議論できなかった。以下、その概要を記す。

本学に何が求められているか

入学者が、いわき市内、福島県内と近県がほとんどであるということから、社会的ニーズとしては、地域的ニーズが大きい。

地域的ニーズとしては、詳しくは父母会、地元高校、地元ジャーナリズムの意向を調べる必要があるが、おおむね、以下のようなものがあげられる。

浜通りの文化的拠点

（単なる）地元の大学

地域内の進学率を高める（関東圏や仙台圏にゆけない学生の）ための大学

まじめ、忍耐強いと言った資質を育てる大学

学生（保護者も含め）のニーズとしては、

公務員や準公務員志向、そのための資格取得のため、ひいては安定した就職のための大学（学部や学科をさておいて）大学だけは出ておきたい（出しておきたい）、
 と言ったものが主であろう。

本学のおかれている状況

いわき明星大学でなければとって、全国から少なくない学生を呼び込んでいないことは、社会的ニーズに答えていない、答えうる大学になっていない現状がある。

また、首都圏や仙台圏志向の学生（特に進学校出身学生）を引きつけることができない状況も目立つ。さらに、地方私大として、いわき市や福島県内の企業や組織から認められるまでには至っていない（半分見捨てられた存在か）。

就職先として、市内や県内の企業が少なく、受験してもなかなか合格しない、と言った状況がある。

本学の長所、短所（＝問題点）

1学科100人程度なので、目配りが利き、きめ細かい指導、対応ができるし、またそうしてもいる。

コミュニケーションが苦手な学生や精神的に脆弱な学生が多く、就職に苦労している。経済的に苦しい学生も多く、夜間のアルバイトなどのため、授業に集中できない場合もある。

地元就職する希望が多い割にその実数が少ないのは、カリキュラムが地元企業の求める学生の能力を高めるようになっていない。また、地元企業に大学の外注する仕事を、できるだけ多く発注するなどして、関係を強化する必要があるのに、従来それが不十分であった、といった理由もあろう。

将来への対策

大学の理念・目標は現状のままで良い。

問題点の解消のため

コミュニケーション能力を高めるために、学生の自主的な活動の場をより多くする。部活動が休止に追い込まれた団体を再開する支援を、大学として行う。

目的・目標の明確でない学生に、モチベーションを高め、維持するため、達成感を常に与えるように、授業を工夫する。そのため、個々の学生に合った目標・目的を与え、それを達成するための支援を行なう。

奨学金制度を拡充し、経済的に苦しい学生のアルバイト依存をできるだけ少なくする。

地元企業への就職を増やすために、どのような能力を有する学生が求められているか、調査を行い、科目やカリキュラムの見直しを行う。

地元企業との関係を、更に強化する。

以上

Dグループ：「いわき明星大学へのニーズとは何かそして、その対策は？」

報告：井澤直也

メンバー：

清水文直
 能地克宜（発表）
 井澤直也（記録）
 窪田文子
 黒見 坦
 土原和子（司会）
 林 正彦（パソコン入力）
 安野拓也（タスクフォース）



作業1：本学へのニーズ

①今本学に何が求められているか？

いわき明星大学へのニーズとは何か？

コミュニケーション能力を持った人材の育成
 地域振興に貢献できる人材育成（健康・福祉の拠点、情報提供・発信・コミュニケーション）
 開かれた大学として多様な相談機能を持つこと
 学問・情報の発信基地
 地元企業への貢献・地域産業に貢献できる人材育成
 温泉街の活性化
 中核都市としての存在意義
 学生が集まることによる経済的効果

学生のニーズ

専門性を身につける
 就職に有効（就職率を高める）
 卒業後の進路を決める
 社会人としての準備
 教養教育
 設備を充実させたい（食堂、スポーツ施設）
 誇りに思えるような大学にしたい
 資格や免許を取りたい（薬剤師、教員、臨床心理士など）
 肩書きを身につけて社会に出たい
 コミュニケーション能力を身につけたい

②本学の置かれている状況分析

今ある問題点とは何か？
 偏差値が低い、基礎学力がない
 向上心が欠落している

魅力のある授業や教員が少ない
学生が気軽に相談できる教員が少ない

〈長所としては〉

就職率は全国平均より10%程高い
県内唯一の総合大学
学生生活の快適さ（家賃、物価）
だれでも入学しやすい

〈短所としては〉

公務員などの合格率が低い
グローバルな視点視座の欠如
定員割れ

③改革の必要性

県内唯一の総合大学であり就職率の高さを堅持しつつ、利点を生かし学部間相互の連携をとり上記の問題点を解決する必要性がある。

作業2：将来への対策案

①大学の理念目標

充実した人間関係を築くために豊かなコミュニケーション能力をもった人間を育成する

②方略

ゲーム機などの大学への持ち込み禁止
基本的な生活マナーを習得させる

③実行計画

挨拶キャンペーンの奨励
規則正しい生活リズムの実施
生活指導オリエンテーションの実施（行動記録分析・面接）

④評価

学生・教員・地域の人により形成的評価

Eグループ：「いわき明星大学へのニーズとは何かそして、その対策は？」

報告：倉澤嘉久

メンバー：

中尾 剛 (パソコン入力)
 江尻陽三郎
 菅野昌史
 田多香代子 (発表)
 倉澤嘉久 (記録)
 高橋 淳
 吉川真一 (司会)
 青山照男 (タスクフォース)



作業1：本学へのニーズについて

[1] 本学に何が求められているか：

(ア) 地域 (地元) の高等教育機関としての受け皿となっている。(イ) 地域に対する活性化の源→地域に大学の研究成果を還元する。(ウ) 地元での就職を前提にすると本学への入学が有利である。(エ) 資格や免許 (教員、薬剤師、等々) を取得出来る。(オ) 入学条件のハードルがやや低目なので入学し易い。

[2] 本学の置かれている状況：

(A) 長所：(ア) 自然環境がよい。(イ) 学生が素直で穏やか、素朴で親切である。
 (ウ) 海や山が近接しているので、身近に研究素材が有る。

(B) 問題点及び改革の必要性：以下の(ア)～(オ)に対処していく必要がある。

(ア) 入学時に募集定員が満たされてない。(イ) いわき明星大学にある学科の内容がイメージしにくい (a: 大学の中身が見えない, b: 本学独自の特色がない)

(ウ) 明確な目標を持っている学生が少ない (a: 都会志向ではない, b: 積極性の欠如)。(エ) 入学生の学力レベルが低下傾向にある。(オ) 精神的に弱い学生が増えて来ている。

作業2：将来への対策案

[1] 大学の理念・目標：

学部毎の特色を考える。(討論時間不足のため検討不十分)

[2] 方略：考えられる幾つかの方法及び実現の可能性について。

方略1：

定員割れを如何に解決するか：魅力的な大学を構築する為の討論を行った。

高校生を如何にして集めるか：以下の(ア)～(カ)の案が提言された。

(ア) 入学後に学科を変更出来る様にする必要がある。(イ) 高校訪問のあり方を再考する (a: 入学者レベルにあった高校を選んで訪問する, b: 複数の学科の教員が訪問する, c: 学生の

出身高校に対して入学生（在学生）に関する情報を提供する。（ウ）卒論研究発表会など節目の行事に関する案内（招待状）を高校に出す。（エ）高大連携を広げる（単位バンク制度の確立）。（オ）高校生向けの公開講座を開催する。（カ）既存学科で学際的な講義を行う。

方略2：

(A) 定員の削減：学生の質の向上を目指しつつ。

(ア) 大学教育を受けるに相応しい人材を取捨選択する。（イ）入試制度の見直し（フィルターをかける）。（ウ）特待生制度を全学的に導入する。

(B) 社会人を受け入れる：少子化の為、高校生の絶対数には限りがある。

(ア) 2部（夜間部）を開設する。（イ）科目を履修しやすくし、履修生を増やす。（ウ）研究生（大学院生）を受け入れる。

[3] 実行計画：主な活動、資源、時期、具体的企画書について。

実行計画1：

高校生を多数集める為になすべき事：上記項目「方略1」に記した（ア）～（カ）を実践するべきということ意見が一致した。

実行計画2：

学生の質の向上及び維持の為になすべき事：上記項目「方略2（A）」に記した（ア）～（ウ）を実践していく。

実行計画3：

少子化問題解消には未だ可成りの時間を要するので、他に目を向ける必要がある。そこで社会人をターゲットにすることになった。上記項目「方略2（B）」に記した（ア）～（ウ）の実践が有効であろうという事になった。

[4] 評価：目標が達成されたか否かを検証する。

(A) 数量的な資料を収集し、比較検討を行う。

(B) 質的な評価方法を検討する。（討論時間不足のため検討不十分）

Eグループでは活発な討論が行われた。多くの意見が出るなかで、以上のような纏めを行い、発表を行った。

グループ発表会の際に以下の様な質問がなされた：（方略1の（オ）に関して）高校に対して出前講座を行っているが、需要が落ち込んでいる。高校生に本学に入学して貰う為には、別な方法を模索する必要があるのではないか。Eグループ内の討論では、高校に出向いて授業をするのではなく、本学に高校生を招いて授業を行う方が効果的ではないかという意見が出ていた。

8. 課題2に関する報告

科目設計：適切なシラバス作成

Fグループ：「地域性と関連する授業：大学と地域の連携」

報告：中田芳幸

メンバー：

中田芳幸（記録）

岩田恵理（司会）

土田節子

末次 晃（パソコン入力）

岩下新太郎

蝦名敬一

永田隆之（発表）

石丸純一（タスクフォース）



1. 討論内容

(1) まず何から取りかかるべきか

順序からいえば、学習の目標を設定した後で、その目標を達成するために授業ごとの学習内容や到達目標を組み立てていくのが本来あるべき手順かもしれない。しかしながら、与えられた授業テーマの中心となる「地域」という言葉に対して、教員の受け止め方が必ずしも一致するとは限らないので、Fグループでは、最初に、「地域」という言葉から何を連想するかと言う点について討論することにした。その結果、各メンバーから、地域の自然、地域の歴史、地域の産業、地域の環境問題まで、様々な観点から言葉が上がってきた。その一方で、地域と言う言葉が持つ空間的な広がりはおおよそ、いわき市とその周辺に限定され、福島県全体におよぶものではなかった。そこで、いわきとその周辺に限定した身近な地域というものに関して、様々な視点から授業を組み立てることとした。内容は、歴史、自然や風土、そして、常磐炭鉱の発展と衰退、エネルギー問題、など各教員から様々な意見が出された。

(2) 学習目標の設定

おおよそ、授業で何を教えるかということが定まったが、知識の提供・伝授に終わってしまう感が否めなかった。特に、「いわき」にさほど興味を持っていない学生や他の地域出身の学生に対しても有意義な講義となるように授業の組み立てを検討した。その結果、学習内容は「いわき」の様々な事柄に限定されるかもしれないが、それらの知識を踏まえて今後の地域の将来を考えることに、より重点を置くことにした。つまり、「いわきの将来に有益な提言を行う」ことをこの講義の目的とし、そのためにはどのような資料が必要か、それをどのように収集するのか、そしてどのように分析するのかなどについて、学生が主体的に習得することを教育目標とした。

(3) 到達目標／内容の設定

授業のおおよその内容に関してはすでに各教員から原案が出されていたので、それをどのように練り上げていくかが次のステップとなった。大まかな講義の流れとして、歴史、風土、自然環境を現地踏査も盛り込んで、いわきの置かれている時間的・空間的位置づけを学ぶ。次に、現在のいわき周辺の観光資源、エネルギー資源、海洋資源を学ぶとともに、それらの資源と産業との関わりを学ぶ。そして、それらをもとに、今後のいわきの在り方を「いわきの未来についての提言」と言う

形でレポート提出させるといったものになった。

おそらく「いわき」に限らずどの地域においてもそれぞれに抱える問題はあるであろうから、それらの問題点を念頭においてそれぞれの地域が将来あるべき姿を考えることは今後の日本において重要になってくるであろう。その様な観点から、本講義は、本学の教育方針に掲げる人材の育成にも繋がるものと判断した。

(4) 成績評価

テーマごとのレポートを60%とし、総括討論後の提言レポートを40%とすることにした。総括討論後のレポートを重視したのは講義の目的が未来についての提言であるからである。しかしまた、この講義を通して、問題発見のためには知識や技能を習得すること自体が教育目標であり、それゆえテーマごとのレポートに関しても60%の重みを付けた。

2. シラバスの作成

Fグループの作成したシラバスは以下のとおりである。

講義名：いわき将来学 ―地域の問題を通して未来を拓く―

学習の目標：地域の特徴や問題を知ることを通じて、問題発見のための知識と技法を身につける。

回	到達目標／内容	学習方法	資源
1	歴史の中に見るいわきの事件簿を再評価する。	現地踏査と対話型と討論	交通費
2	いわきの風土と自然環境の特徴について理解する。	講義	
3	いわきの風土と健康の関連性について説明できる。	SGD	
4	いわき市の観光資源について説明できる。	講義	DVD
5	近代日本のエネルギーを支えた常磐炭鉱の歴史と石油エネルギーへの転換による、地域経済の変動を理解する。	外部講師による講義	講師料
6	エネルギー政策における新しいエネルギー源として福島原発の設置問題を理解する。	講義	
7	いわき市の環境問題と自然環境との関わりについて理解する。	見学	交通費
8	いわき市のさまざまな産業従事者の推移について理解する。	調べ学習と討論	
9	いわきの海産資源について説明できる。	外部講師による講義	講師料
10	総括討論：これまでの学習内容を踏まえて「いわきの未来」についての提言をレポート形式でまとめる。	SGD	

3. 反省点

時間的制約のために、到達目標に関しては十分な討論ができなかった。授業ごとの内容を学ぶ上で有効な授業形式は何かという点に関して若干の討論はしたものの、学生が主体的に取り組めるような工夫や仕掛けを作るまでには至らなかった。その結果、「理解する」と言ったような概念的な言葉をそのまま用いてしまった。この点に関しては、発表後の討論でもコメントを頂いた。また、小人数ごとの討論を授業に取り入れてみたが、その進め方やそれをどのように成績評価に結び付けるかについて、十分な討論ができなかった。

科目設計：適切なシラバスの作成

Gグループ：「地域性に関連する授業：大学と地域の連携」

報告：富田 新

メンバー：

桜井俊明

楊 仕元

今泉瑞枝

富田 新 (パソコン入力・記録)

江藤忠洋 (司会)

菊池雄士 (発表)

桜井映子

福田幸夫 (タスクフォース)



1. テーマに沿った授業内容の検討

江藤 忠洋さん(薬学科)の司会により、まずいわきの“地域性”についての議論が行われた。

いわきのもつ地域性に関して、資源・産業・文化・生活などの広い観点から、テーマの洗い出しが行われた。各教員の専門的背景から、いわきのもつ地域性として、以下のような項目が提案された。

いわきの地域性・・・いわきの文化の理解(吉野せいの文学など)

観光資源の活用の仕方

ソーラーカーと太陽エネルギー

食生活と健康

天然資源の活用と環境問題への対応(石炭・水産資源の活用・環境エネルギーの問題など)

地域の福祉問題とその支援のあり方

本学の科学技術学部ですでに研究がなされている幾つかのテーマ(ソーラーカーなど)を軸として、授業名を「地域資源活用」とすることが決定された。授業名からもわかる通り、科目の内容は、自然科学分野的なものとなっている。総花的に学ばせるよりも、ある程度テーマを絞り、体系性をもたせた方が良いと言う意見が出て、このような授業名・テーマに落ち着いた。

2. 学習目標の決定

授業の目標としては、単に過去や現状を知るだけの受動的な授業ではなく、学生自らが問題にコミットし、地域に貢献できる提案や情報発信ができる、未来志向的授業とすることを目標とした。また、地域連携につなげる観点から、地域社会の中にある施設や機関への見学実習を積極的に取り入れることで意見がまとまった。

また、できるだけ学生の参加意識を促し、最終的には、(稚拙でも良いので)学生自身が何らかの提案ができるようになること、プレゼンテーションと討議の機会を設けること、等で意見の合意をみた。これにより、授業形態は「演習」ということになった。

3. シラバスの作成

10回の授業のカリキュラムの骨格としては、まず、いわきにある様々な天然資源について知り、その歴史や文化、活用法について理解することから始める、次いで、将来活用の見込める幾つかの資源（太陽エネルギー：石炭エネルギー（新規活用法の開発も含む）：海洋資源：水産資源）の見学実習を行い、自分が最も関心をもった資源を1つ選択させる、その後、それらに関する課外（自宅）学習を行わせ、最終的に、地域に少しでも役立つ新たな活用法の提案を行わせる、というやや盛り沢山な内容となっている。これらの個々の目標を達成させるために、10回の授業の中には、座学（講義）のみならず、現場体験（見学実習）、新たな使用法の発案に関する自己学習（自宅学習：これはシラバスには書かれていない。むしろ、自宅で行う宿題に相当する）、プレゼンテーション（演習）などが盛り込まれることとなった。

ただし、時間の関係もあり、授業で用いる“資源”、及び具体的な“評価法”等については討議することはできなかった。

4. シラバス

最終的に出来上がったシラバス等は以下の通りである。

授業名：「地域資源活用」

学習目標：地域に貢献し、新しい情報を発信できるようになるために、資源としてどのようなものがあり、現状ではどのように活用されていて、将来的にはどのように活用できるのか等、を理解する。また、それらの新しい活用法等について、社会に提案できるようになる。

シラバス：

1. いわきの天然資源にはどんなものがあるか？（講義）
太陽・石炭・風力・温泉・海洋資源の特徴について説明できる
2. 資源活用の歴史と文化（講義）
いわきにおける資源活用の歴史と文化・生活の知恵について説明できる
3. 産業への活用の現状と課題（1）・・・太陽エネルギー（講義と討論）
太陽エネルギー活用の現状と課題について説明できる
4. 産業への活用の現状と課題（2）・・・化石燃料（講義と討論）
化石燃料活用の現状と課題について説明できる
5. 現場研修（実習）
ソーラーカー体験または石炭化石館見学を通して歴史と現状に触れる
6. 産業への活用の現状と課題（3）・・・海洋資源（講義と討論）
海洋資源活用の現状と課題について説明できる
7. 産業への活用の現状と課題（4）・・・農林資源（講義と討論）
農林資源活用の現状と課題について説明できる
8. 現場研修（実習）
小名浜港近辺または農事試験場等の見学を通して歴史と現状に触れる
9. 新たな活用法についての討論（グループ討論）
獲得した知識を基に、新たな資源活用のモデルの構築と提案を行う
10. 発表と提言（グループ・プレゼンテーションと全体討議）

科目設計：適切なシラバスの作成
Hグループ：「21世紀の諸課題に対応する授業」
 報告：鎌田真理子

メンバー：

東 之弘
 仲村渠哲勝
 鎌田真理子（記録）
 本多明生（パソコン入力）
 鹿児島正豊
 角田 大（発表）
 村田 亮（司会）
 竹内良亘（タスクフォース）



1. 役割分担

各種役割は難航気味になる前に司会役を立候補いただき、次々と決定していった。

2. 司会進行から時間配分が提案され、作業手順の確認が行われた

13:00-14:10・・・学習目標、授業名検討

14:10-15:00・・・シラバス内容検討

15:00-15:35・・・評価、成績について

以上の内容を協議しつつPCに入力していった。

3. イメージする内容を出し合う

地球温暖化の発生メカニズム、対応などがイメージとしてあげられた

4. このテーマをどのように解釈するか

- ・学生の学びの希望について検討してみることが重要だ。
- ・今までの内容であれば古典的なものになり従来通りの内容になってしまう。
- ・学部の縛りに関係のないテーマ、内容で一般教育科目としてはどうか。
- ・しかし限定的なものでなければ浅薄な概要で興味を持てる学生がいるかどうか疑問である。
- ・具体的なテーマを取り上げることも有用ではないか。
- ・本学がすぐ取り組める内容で本学の特性が出せるものが望ましい。
- ・たとえば地球温暖化についてならば総合的なテーマでもあり本学に実績はある。しかし理論を全面に押し出すと教育的なイメージが目立ち、理論にあわせたシラバスになってしまう。環境はやはり大きなテーマで、人材の姿が広い。実現可能な科目にしていくことが求められている。
- ・「食」のテーマも出される。この時、やや拡散気味の議論に薬学部の学生の興味やニーズについて意見を求められた。
- ・災害支援が注目されている「安全・安心」の提案を受け、そのテーマに固まる。

5. 授業名

「安全と安心の科学」

6. 学習目標の設定

- ・KJ法での意見集約が提案され、早速、検討に入る。各自3～5枚のカード（ポストイット）が提出された。
- ・1～10回の学習目標や授業等について出されたカードを壁面に張り付け分類していった。

7. 授業についての検討

- ・キーワードとして自然現象、災害、人、健康、こころ、社会システムなどが出される。

- ・ これらキーワードをオムニバスにするよりも、3分野に絞りこみ深化させる授業にする。
- ・ 3分野を3コマ構成で、講義・演習・実験などで多様な技能も修得する。
- ・ 学生だけでなく地域に開かれた講義として位置づけ、夜間開講にする。

8. 成績・評価

評価の仕方と、それぞれの評価の割合がパーセントで示された。

9. その他（発表したシラバスは以下の通り）

・ 学習目標

● 授業目標

- 社会生活において自己を取り巻くストレスや将来的に生じる可能性のあるリスクを把握し、予測・対処する方法を身につけるために、自然災害、日常生活と危機管理、心の病と対処法について理解する。

● 到達目標

- 後述のシラバス案にて記載

・ シラバス

回	到達目標／内容	学習方法	資源
1	イントロダクション： 今後の学習内容を把握し、その内容を説明できる	講義	
2	自然災害（1）： 自然災害の現状とメカニズムを理解し、列挙することができる	講義	
3	自然災害（2）： 自然災害の対処法を理解し、体験する	演習	消防署員
4	自然災害（3）： シュミレーションを通して、獲得した知識・能力を習得する	SG 討論	セミナー室
5	日常生活と危機管理（1）： 食品の安全性の問題について理解し、列挙することができる	講義	
6	日常生活と危機管理（2）： 食品中の残留農薬量を測定することができる	実験	測定用機材
7	日常生活と危機管理（3）： 日常で実践できる食のリスク・マネジメント法を学び、獲得した知識・能力を習得する	SG 討論	セミナー室
8	心の病と対処法（1）： 心の病の諸特徴を理解し、列挙することができる	講義	
9	心の病と対処法（2）： 自己のストレスの把握、ストレスレベルの計測することができる	実験	測定用機材
10	心の病と対処法（3）： ストレス・マネジメントの効果とその多様性を理解することができる	講義	

・ 成績評価

- 3領域終了後に小テスト（客観試験）を実施
- SG 討論時は観察試験
- 全領域終了後にレポート提出
- それらの成績を加えて、最終的な総合評価
- 成績評価のウェイトは以下の通り
- 客観試験（×3）： 10×3 = 30 %
- 観察試験（×2）： 10×2 = 20 %
- レポート： 50%

科目設計：適切なシラバスの作成

I グループ：「21世紀の諸課題に対応する授業」

報告：叢 小榕

メンバー：

- 佐藤健二（発表）
- 叢 小榕（記録）
- 大原貴弘（パソコン入力）
- 金 容必（司会）
- 久保博昭
- 村田和子（記録）
- 鈴木政雄（タスクフォース）



1. 討議内容

- (1) 環境エネルギー問題 モラルの問題としてではなく、より現実的な認識が効果的と考えられる。技術の発展により、今後は省エネのほうがコストが低い。
- (2) 人口問題 世界の人口は増え続ける一方、日本などの先進国では少子化が問題とされている。しかし、少子化対策はある意味では人類の欲望を満たすために無理に人口を増やそうとする一面も否めないため、見直すべきではないか。その根拠としては、今から約 2500 年前の韓非がすでに人口の増加による資源の相対的減少が原因で、人類が資源獲得のために争うようになることを指摘していたこと、マルサスもその人口論において、人口の増加による悪を提起していたことなどが挙げられる。
- (3) 教育問題 ゆとり教育の弊害から学生支援の必要性を提起。今後の課題としては、問題を見つけ、解決案を出す能力の養成。

2. 具体案

- (1) 授業名 「21世紀の地球を考える」
- (2) 受講者数 60名
- (3) 学習目標 環境エネルギー問題、人口問題、教育問題といった「21世紀の諸問題」を認識し、その解決策を提示できる。
- (4) シラバス

授業内容／到達目標	学習方法
ガイダンス／授業内容の説明、講義、プリント	講義
環境エネルギー問題（1）／環境エネルギーの問題について討論し、問題提起できる。	グループ討論
環境エネルギー問題（2）／人類文明の歩みと環境エネルギー問題について理解する。	講義
環境エネルギー問題（3）／環境エネルギー問題の解決策について討論し、提示できる。	グループ討論と発表

人口問題（1）／人口の問題について討論し、問題提起できる。	グループ討論
人口問題（2）／国内外の人口問題について理解する。	講義
人口問題（3）／人口問題の解決策について討論し、提示できる。	グループ討論と発表
教育問題（1）／教育の問題について討論し、問題提起できる。	グループ 討論
教育問題（2）／21世紀の教育問題について理解する。	講義
教育問題（3）／日本における教育問題の解決策について討論し、提示できる。	グループ討論と発表
期末試験	

(5) 資源 講義については外部から講師を依頼（謝金 10,000～15,000 円×3）
先導・評価のため、グループ討論においては各グループに教員1名を配置。

(6) 評価方法

1) 討論素材レポート（10%×3）

⇒知識・態度の評価、形成的評価・総合評価

2) グループ討論 観察試験（10%×3）

⇒技能・態度の評価、形成的評価・総合評価

3) 期末論述試験（40%）

⇒知識の評価、総合評価

一律パーセンテージによる評価ではなく、レポートの内容の質によって評価する（ただし、評価における主観的要素の排除が難しいのも事実）。

科目設計：適切なシラバスの作成

Jグループ：「職業意識と労働意欲を培う授業」

報告：高橋義考

メンバー：

高橋義考（記録）
 吉田喜孝
 大橋純一（発表）
 神山敬章
 川口基一郎（司会）
 桜井ルミ子（パソコン入力）
 佐藤直記
 森 文弓（タスクフォース）



グループ討論内容：

テーマ内容を検討するに当たり、授業の目的について討論を行った。以下に意見をまとめる。

- ・ 社会に役立つ人材、活躍できる人材となるよう育成することが大切である。
- ・ 学生が就職をどのように考えているか把握する。
- ・ 資格取得の役割を説明する。
- ・ 職業の動機付けが大切である。
- ・ 見学等で実体験させる必要がある。
- ・ 外部講師やDVDを利用し、動機付けを行う。
- ・ ニートやフリーターにならないよう指導することが大学の役目である。
- ・ インターンシップ科目と連携した指導を行う。（行く前、行った後）
- ・ 各学科の専門科目が社会にどのように役立つのかを理解させる。

このような目的を達成するのに必要と思われる科目内容について討論を行った。以下に意見をまとめる。

- ・ 職業人としての「プロ意識」を持たせる。
- ・ 社会に役立つ自分の生き方、人格形成について考えさせる。
- ・ コミュニケーション能力を身に付けさせる。受講生同士のディスカッション。
- ・ プレゼンテーション能力を身に付けさせる。
- ・ マニュアルの理解力とパソコン能力を身に付けさせる。
- ・ 現場の生の声を聞かせる。
- ・ 人のことを察する力を身につけさせる。
- ・ 人生設計を考えさせ、労働の重要性を認識させる。
- ・ 失敗したときの対応方法、ノウハウを身に付けさせる。

授業の対象学年、人数、教員数については以下のように検討した。

- ・ 対象学年は2年生 前期
 （1年生では早すぎ、3年生ではインターンシップ、就職活動が始まってしまう）

- ・ 受講生人数 50名、 教員数2名
(グループディスカッションなど、グループ分けできる人数を考慮して)

最後に検討したシラバスの内容を以下にまとめる。

社会に必要とされる私

2学年 前期

【学習目標】

- ①授業の目標：職業を通して社会に役立つ人格形成を認識する
- ②到達目標：豊かな人生を送るための社会人、職業人としての心構えを理解する

【講義内容】

回	到達目標/内容	学習方法	資源(予算)
1	現代社会の構造と職業	講義、自由討論	教員
	・現代の政治経済の激しい社会変動の現状を理解できる		
2	職業観と労働観	講義、自由討論	教員
	・職業を通じ、経済活動の必要性を理解する。		
3	男女共同参画社会	講義、DVD	教員、DVD
	・男女平等の視点で職業観を理解できる。		
4	自分の将来像、人生設計(1)	グループディスカッション、発表	
5	自分の将来像、人生設計(2)	グループディスカッション、発表	
	・グループディスカッションを通してライフステージにおける各自の職業観を交換し合う。		
6	職業人としてのプロ意識の確立	講義	外部講師
	・職業人としての心構えを理解する。		
7	インターンシップに向けて	講義	教員
	・インターンシップの内容を理解し、将来の職業に結び付ける。		
8	現場の生の声	講義	卒業生、企業外部講師、インターンシップ体験者
	・いろいろな体験談を聞いて将来の参考にする。		
9	社会人としてのマナー	講義	教員
	・自己実現のための技術、方法等を学べる。		
10	豊かな人生を送るために	発表	
	・獲得した知識、能力を系統立てて理解する。		

【評価方法】

- ・ グループディスカッションでのプレゼンテーション (40%)
- ・ 課題のレポート (40%)
- ・ 出席点 (20%)

科目設計：適切なシラバスの作成

Kグループ：「職業意識と労働意欲を培う授業」

報告：大林尚美

メンバー：

高 三徳

梅村一之（司会）

五十嵐幸一

林 洋一（発表）

大林尚美（記録）

丸山博文（パソコン入力）

吉田 進

竹中 久（タスクフォース）



「職業意識と労働意欲を培う授業」のテーマについて、適切なシラバスの作成を行った。作業は、スモールグループディスカッション（SGD）で行い、①授業名、②学習目標、③シラバス、④成績評価、⑤全体の確認の順に進めていった。以下に、グループ報告内容及び討論内容を記した。

【授業名】 キャリアプラン

【科目】 一般教養科目

【対象】 1, 2, 3年生前期、2単位

【学習目標】

授業の目標：

1. さまざまな職業について理解し、何のために働くかを認識する。
2. 調査・研究を通して職業意欲を培うことができる。
3. 就職意識を高めミスマッチによる離職を防ぐことができる。

到達目標：

キャリアプランシートを作成することができる。

＜シラバス＞

回	項目	到達目標／内容	学習方法	資源
1	オリエンテーション	学校(大学)と社会の違いを理解する。職業について理解し、取得できる資格を知ることができる。	講義	
2	働くことの意義	働くとは何か、その意味、価値、義務、何を不得何を失うのかを認識する。社会貢献についての位置づけを理解する。	講義	
3	職業について	OB、OGによる私の職業紹介 私の成功体験と失敗体験。	講義	外部講師
4	将来設計1	キャリアデザインシートを作成し、現在の自分のなりたい仕事を具体的に記述することができる。	演習	
5	職場体験	職場体験により、職種の内容を理解することができる。	学外研修	研修費
6	調査1	いわき市の職種と就職状況についておよびニート等について調査し考察する。	演習	調査費
7	調査2	発表用の資料を作成することができる。	グループワーク	
8	調査報告	調査報告を行い、調査について学生同士で評価することができる。	全体討議	
9	将来設計2	職に就くためのこれからの学生生活の過ごし方の将来プランの設計をすることができる。	演習	
10	全体報告	将来プランについて報告することができ、また、各自の報告を相互評価することができる。	演習	

【成績評価】

成績評価基準

- ① レポート評価: 25点
- ② 将来プラン評価: 25点
- ③ 学生による相互評価: 25点
- ④ 出席率: 25点

【教員との連絡方法】

オフィスアワーおよび電子メール

討論内容：このテーマは、成績評価が非常に難しい授業である印象をグループ内で受けたため、学生にとってできるだけ理解しやすいよう心がけて作成した。しかし、討論では、シラバス中の到達目標の2番目に「・・・・・・を理解する。」の表現を用いたことで指摘を受けた。「理解する」は、概念的言葉で成績評価の程度が非常に不明確であるので、学生・評価する両者がより分かりやすい具体的な表現への改善が必要とのことでした。

以上

科目設計：適切なシラバス作成

Ⅱグループ：「地域性と関連する授業：大学と地域の連携」

報告：清水信行

メンバー：坂本直道（パソコン入力）、清水信行（記録）、上野直紀、吉川吉美（司会）、板倉敦子（発表）、佐々木秀明（タスクフォース）

1. グループ討議

テーマ：地域性と関連した授業：大学と地域の連携

- (1) 時間が限られており事務局から課題が予め提出されているので、これについて確認をしたところ田中副学長からアドバイスがあった。
「参加者全員で一つの科目を設定する。例えば、全学共通の一般教育科目の一つと仮定して、科目を設定し、全員で相談してシラバスを作成してはどうか。」
この方向で作業を進めることが参加者全員で了承された。
参加者は3学部にまたがっているものでこれに共通するものは何か？をまずさがした。
- (2) 地域性を考えたらテーマとして次が考えられる。
 - ・ 工業
 - ・ 自然環境
 - ・ 伝統
- (3) 薬学部では
 - ・ 生涯学習
 - ・ 出張講座
- (4) 大学の地域に果たす役割とはどのようなものがあるのか？（全員思いつくままに意見を述べる）
 - ・ 木球 ～ 市民との係わり
 - ・ ストレスマネジメント、メンタルヘルス ～ 心理
 - ・ 内容は市民講座的なものでも良いのではないかな？
 - ・ 参加メンバー（5人）で全員が参加できる科目を設定できれば、それも面白い。
 - ・ ユニークな切り口での授業を考えられないかな？
 - ・ 学生が早く地域にとけ込めるための授業ができないかな ～ これを新入生に対して授業をしたら効果的ではないかな？地域性を広げる内容、大志を抱くような内容、意識を高める内容など。
 - ・ 海を見ていない新入生が多い ～ “いわきを知る”
 - ・ 海岸生物 ～ アクアマリンの見学など。
 - ・ 3学科3領域でレクチャー科目を作る。
 - ・ identityの滋養、認識。
 - ・ いわき市のidentityは何か？駅を見てもぱっとしない・・フラガールだけでは物足りない。
 - ・ いわき市、いわき明星大学からのメッセージの発信がこれまで弱かった。

以上の討議の結果、メンバーが思いつくことをある程度、出し尽くしたと判断し、時間の制約もあることから科目のテーマを決め、シラバス作りの具体的な検討に入った。

科目名：[いわき発展学] とする

- (1) 見つめる（これまでのことを押さえる） ～ “いわき学” というのがあった。
- (2) どのようなテーマを出して、どのように発展させられるかな？

～提案型～可能性～プランをまとめたい。

学習目標の設定

ミッション ～ 大学の理念からはなれてはならない。

前半目標：

- ・ いわきの歴史を知り、現状を理解する。(他地域との比較を含む)
- ・ 歴史からこれまでの発展を講義する。 前半 1～2回の授業でこれを行う。

後半目標：

- ・ いわきのこれからの発展の可能性を探る。
- ・ 問題意識を持って地域発展に貢献できるための力を身につける。
- ・ 意識を高める。

シラバスの作成 ～ 具体的なシラバスの作成は討論と同時並行にパワーポイントに打込んでいった。

以下の部分はパワーポイントの完成版にまとめられている。シラバスの大略の構成は次のようである。全11回の講義を想定している。下記の部分を担当者(名前の書いてある人)で作成。

- (1) 総論
- (2) } 科技 ～ 清水、坂本
- (3) }
- (4) }
- (5) } 薬学 ～ 板倉
- (6) }
- (7) }
- (8) } 人文 ～ 吉川、上野
- (9) }
- (10) }
- (11) 総括

シラバスの具体的な内容はパワーポイントにまとめ上げられている。

シラバス作成完了 (全15ページのうちの一部)

回	到達目標・内容	学習方法	資源
1	2～10回の概要を説明し、講義の狙いを理解する。	講義	
2	いわきの産業の歴史と現状を理解する。	講義	
3	いわきの産業における特徴と問題点の抽出し、問題意識を持つ力を養う。	講義	
4	いわきの産業の発展の可能性と具体的提案を討論し、アクションプラン力を養う。ポストテストを行い2～4回の講義の成績を評価する。	講義とグループ討論	
5	医療過疎地であるいわきの現状を認識し、解決策を提示する力を養う。	講義	
6	薬事法改正に伴う影響の調査を行うことにより、問題点の抽出能力を身につける。	フィールドワーク	
7	いわきの食と医療の理解を通して、問題点の抽出能力を身につける。ポストテストを行い5～7回の講義の成績を評価する。	講義	
8	映像学からみたいわき市の発展についての理解を促す。	講義	
9	福祉学からみたいわき市の発展についての理解を促す。	講義	

10	メンタルヘルス学からいわき市の発展についての理解を促す。ポストテストを行い7～10回の講義の成績を評価する。	講義	
11	試験を実施し、全講義の成績を評価する。		

2. 作成シラバスの発表

発表参加者：関口学長、田中副学長、宮腰、片寄、高橋、坪井(総務)、渡辺、シラバス作成メンバー5人

発表者：板倉

作成パワーポイントを使用して発表された。その後に質疑応答があった。

(1) 第6回のフィールドワークとはどのようなことか？

- ・ドラッグストアや保健薬局：扱う薬の種類が制限されることにより、どのような影響がドラッグストアや保健薬局にあるかを現地調査する。

(2) 対象者

- ・1年生

(3) 評価は？どうするか

- ・各グループで最低各1回×3グループ、最後1回の計4回の小テストとする。
この質問を受けて、評価の検討がなされていないことに気づき、後でシラバスに追加した。

(4) 田中副学長からのアドバイス

- ・学生を主語とするように表現する。
- ・評価の記入等によりシラバスの完成度をもう少し高めて欲しい。
- ・2単位(90時間を勉強させる)。前もって調べて授業に参加するようにさせるなどのことも考慮に入れたい。

以上

科目設計：適切なシラバス作成

Mグループ：「21世紀の諸問題に対応する授業」

報告：上野俊一

メンバー：上野俊一（記録）、小池久恵、佐藤一昭（発表）、高木竜輔（パソコン入力）、柳澤孝主（司会）、福島朋子、鈴木政雄（タスクフォース）

(1) 科目設定

シラバス作成にあたり、科目の設定やどのような学生を対象するのかについて話し合った。この点についての共通理解が必要であるとし、全員が意見交換した。（例：一般教育科目、教養ゼミ）タスクフォースの鈴木先生より、時間の制約もあり、シラバス本体の作成に取り掛かるようアドバイスがあり、科目設定をしないまま、シラバス作成に取り掛かった。

(2) 10回分の講義テーマ

参加者各自が講義2回分のテーマを考えた。

柳澤：1、少子高齢化 2、核家族化

佐藤：1、過疎と過密 2、観光立国日本

高木：1、環境問題 2、町づくり、農村と都市

福島：1、ネット社会、携帯電話 2、人間関係の希薄化、コミュニティ

小池：1、正しい日本語 2、メディアリテラシー

上野：1、外国語教育 2、日本のメディア戦略

上記より、テーマを4つにまとめた。さらに、講義の連続性を重視し、講義の順番を検討した。

4つのテーマ

1. 都市化と過疎化
2. 人間関係の希薄化
3. メディア社会の問題
4. 国際化と日本

(3) シラバス作成

パワーポイントでの入力をしながら、各講義のシラバスを作成した。毎回の到達目標、方法、資源、評価について、さまざまな意見が参加者から出された。グループディスカッションやグループ発表、見学（フィールドワーク）、映画鑑賞、データ分析、外部講師による講演といったアイデアが出され、内容の充実した講義シラバスができた。また、シラバス作成の際の細かな表記についても理解した。

(4) シラバス完成

時間の制約もあり、今回の研修会では5回分の講義のシラバスを作成した。後日、10回分に作成し直すこととした。

学習目標—現代日本の抱える諸課題を構造的に把握し、個々の諸問題（少子高齢化、人間関係の希薄化、メディア、国際化、等々）を具体的に説明できる。

回	到達目標	方法	資源	評価
1	家族の変遷を社会・心理学的に確認し、人間関係の希薄化を理解する。	グループ討議	パソコン、DVD	小レポート
2	家族の変遷を社会・心理学的に確認	講義（人間関係に関する		小レポート

	し、人間関係の希薄化を理解する。	るデータを提示する)		
3	いわき市内における中心市街地と限界集落の現状を調べ、都市化と過疎化の現状を理解する。	フィールドワーク	見学引率、バス、デジタルカメラ、デジタルビデオ、パソコン、GPSユニット、謝礼	見学態度、グループごとのプレゼンテーション
4	いわき市内における中心市街地と限界集落の現状や都市化と過疎化の現状をフィールドワークに基づいてまとめ、発表する。	グループ学習	前回のフィールドワークにおける記録など	グループごとのプレゼンテーション
5	映画『家族（山田洋次監督）』を通じて、日本の家族像について理解する。	グループディスカッション	DVD	グループ発表の内容、ピアレビュー
6	映画『東京物語』を通じて、少子高齢化の問題を理解する。	グループディスカッション	DVD	グループ発表の内容、ピアレビュー
7	現代日本社会とメディアについて概要を理解・説明できる。	講義		レポート提出
8	メディアの功罪について事例を提示し具体的に理解・説明できる。	グループごとにテーマ設定し、インターネットで調べる。	パソコン	グループ報告、ピアレビュー
9	グローバリゼーションを理解し、自他の文化を両面から説明できる。	講義、トークセッション、質疑応答	ゲストスピーカー（外国人、日本人）	小レポート
10	グローバリゼーションを理解し、日本の将来について、考える。	グループ討議及び発表（ポスターセッション）	ポスター、筆記用具、新聞	発表

(5) 発表

パワーポイントを用いての発表後、質疑応答があった。まず、関口学長より、この科目設定について質問があり、「人文学部一学年対象、一般教育科目、教養ゼミ、30人程度」ということにした。

フィールドワークを取り入れる意義について、発表者佐藤より説明を行った。

(6) 修了書授与

学長より、参加者全員に修了証書が手渡された。

(7) 成果

今回、人文学部の各学科からの教員が参加し、ひとつの科目を作り上げる作業を行ったことは、教員交流という点で良い機会となった。参加者一人ひとりから、学習方法や資源などについて、いろいろなアイデアが出され、日頃より人文学部の教員がいろいろなアイデアを自らの講義や授業に取り入れ、教育に取り組んでいることが確認できた。

人文学部としては、全学対象としたFD研修会より、科目や学科ごとに集まり、もっと具体的な研修会が望ましかったのではないだろうか。

9. 第1回FD研修会に参加しての感想

諸星 裕先生（基調講演講師）からのコメント

FDにお招きいただき、大変有難うございました。

正直申し上げて貴学はもう少し普通の大学であろうと思っておりました。しかしながら、地理的な条件やキャンパスのインフラなど、うらやむばかりの素晴らしい大学でありました。

また、本報告書に教員諸氏から寄せられた成果報告・感想は、小生のこれまでの経験を超す濃いもの

でありました。そこには大学の進むべき道に関し危機感を共有されておられる方がおり、



生き残るためには何をしたらよいかを模索されておられる極めてまじめな教員諸氏がおられました。小生の講演から様々なヒントを得たという数多くの教員がおられたことは、講師としてお役に立てたとの大きな満足感があります。もちろん、異論、反論、疑問なども多々あると思いますが、もし次にお会いする機会があれば、喜んで議論をしたいと思います。

同じ職業に身を置く者として、この業界（？）が重大な危機に面していることすら感じておられない方々が全国に多くおられます。少なくとも貴学の先生方は、そのような方は少ないとお見受けしました。学長先生、副学長先生以下のリーダーシップのもと教職員の皆様が一丸となり、益々貴学が発展されること祈念いたします。お招きいただき、2日間ご一緒することができましたことを、再度御礼申し上げます。



桜美林大学大学院・教授 諸星 裕

所属： 電子情報学科氏名： 大 表 良 一

基調講演「我が国の大学の致命的欠陥」はなるほどと思うことが多く、参考にすべきと思う。あとはこの大学として何を取り入れ、何を取り入れないか、取り入れるものがあるとしたら、何からどのような手順かを決め、実行することが必要だと思う。例えば、ミッションを再検討するのかどうか、その具現化をどうするのか、アメリカのなんとか大学のように教育に関することだけ評価の対象にするのか、今まで通り、研究成果のみ評価の対象にするのかと言ったこと。いままで、色々な研修会に参加して（させられて）きたが、ほとんど全てで研修会をただけに終わり、その後のフォローが何もなされなかった。今回もそのようなことになりかねないと思うが、できればそうならないことを祈る。

いずれにしても、(大学全体としてどうなろうとも) 個人としてできることは取り入れていきたい。

所属： 電子情報学科氏名： 坂 本 直 道

内容が充実した研修会であったと感じた。

諸星先生のご講演のなかであったように、以前から社会における本学の役割について考えることはあったが、これを機に教職員個々人で考えるのではなく、大学全体あるいは主導者的立場の方々にこれを明確にし、その方針に対して募集活動などに関する戦術を練っていく必要があるのではないかと改めて感じた。

また、他大学におけるFD活動に関する様々な情報を得ることが出来たことは収穫であった。ただFDの導入・充実が教育機関の義務であるとの理解は出来たが、現実問題としてそれによる募集活動ならびに就職状況への影響についての様々な事例に関する情報があれば、より目的意識を持ってFD活動に関われるのではないかと感じた。

所属： 電子情報学科氏名： 清 水 文 直

まず、今回のFD研修会を開催するにあたり、その準備に尽力された関係者の皆様にお礼申し上げます。このような機会があったことで、授業の無いこの時期には実験室に閉じこもりがちになりますが、これまであまり使わなかった部分の頭の訓練ができたのではないかと思います。

基調講演にお越しくくださった桜美林大学の諸星先生のお話は、興味深い、あるいはおもしろい、退屈させないお話でした。教員ばかりではなく、事務職員の方もお聞きいただいたのだらうと思いますが、大変好評であったのではないかと思います。本学の教職員だけで研修会を進めるよりも良かったと思います。

グループ討論では、グループのメンバーの皆さんは中断なくご意見を交わされて、与えられた課題に対して短い時間内でまとめ上げて行こうとする前向きな姿勢があって良かったのではないかと思います。

所属： 電子情報学科

氏名： 高山文雄

- ① 基調講演：我が国大学の致命的欠陥(諸星裕先生)
講師の本を既読していたので、内容はよく理解できた。大学が生き残るには、明白なミッションが必須、シラバスへの反映、GPAで大学が変わる、アドバイザー制度できめ細かな指導、いわきは地域的に恵まれているが大学は2つはいらぬなど刺激的のものであった。
- ② キックオフ・レクチャ1：医療系教育におけるカリキュラム立案(山崎洋次先生)
何を教えるかでなくて、いかに教えるかが重要ということ。これは人の命を預かる学問領域ということで、必然的に出てきた教育の方法であると感じた。これまで私の学問分野では、学生への教育は教員の背中を見て学べというものであった。
- ③ キックオフ・レクチャ2：シラバスの意義と作成法(諸星裕先生)
シラバスについて以下のことを明白に認識させられた：管理責任者は学科主任である、シラバスの書き方としては大学のミッションに沿ったもので単位をとれば内容修得を保証するものになっている必要がある、評価基準の明確化など
- ④ グループ討論と発表
グループのテーマとしては、「いわき明星大学へのニーズとは何か」であった。全入時代を迎えた本学の学生にどんな付加価値が与えられるかの観点から討論したがこのようなことは今まで教員仲間と雑談で話す程度であったので、大学教員の責任の重さを強く感じた。
研修会の総合的な感想として、教員が一堂に会して教育のやり方を話し合ったり、研修を受けたりすることは、これからの大学教育には重要であると感じた。

所属： 電子情報学科

氏名： 竹内良亘

シラバス作製の練習で出て来た科目「安全・安心の科学—日常生活のリスクマネジメント」は本当に実施科目になりそうな気配である。

所属： 電子情報学科

氏名： 竹中久

基調講演「わが国の大学の致命的欠陥」は大変ためになった。学生を中心に考えて大切にするとどのようなことか、問題点が整理されており、参考になった。また、大学の建学理念、設置目的、それらを実現するための具体的方法など、忘れていた現状が指摘され、問題点の本質を見直すきっかけとなった。

キックオフレクチャーⅠ、Ⅱは今後の授業方針と方法ならびにシラバス作成に関して、大変参考になった。続くグループ討論で具体的にシラバスを試作した経験は非常にためになった。授業内容の精選と具体的授業方法、そしてそれらに劣らず大切な客観的評価をどのようにするか、考えさせられる事柄が多かった。

所属： 電子情報学科

氏名： 中 尾 剛

諸星先生のお話は、非常にインパクトがあり印象的でした。

早速、後期の講義から取り入れています。

大学は学生に満足を与える授業を行うことが第一の使命だと改めて感じました。

今回、出席してよかったと思います。

所属： 電子情報学科

氏名： 中 田 芳 幸

今までのFD関係の取り組みは、FDフォーラムや授業評価に関するものに限られていたが、今回シラバス作成と言う新しい試みはよかったと思う。FDと言うと、話し方や板書の仕方など技術面が重視されがちであるが、講義の教育目標や到達目標をきちんと定め、また、学生に対する習得度をきちんと評価することの重要性をあらためて認識できたように思う。

ただ、研修でのシラバス作成の作業においては時間の制約があり、時間に追われての作業となった。そのため、授業の内容、すなわち何を教えるかと言う点にどうしても議論の重点が移ってしまい、シラバスを作成する上での注意点に関しては不十分な議論になったように思う。もっとも、何を教えるかと言うことがはっきりしないうちは、どのように教えるかということも明確になってこないで、シラバスを作成する上での技術的なところまで議論を尽くすことは時間的にも少々難しかったと思う。そういう意味においては、FDという観点から少しずれてしまった気もする。しかし、このような機会がなければおそらく意見交換をすることはないであろう他学部の先生方といろいろ議論できたことは有意義であったと思う。

また、諸星先生のお話もいろいろ参考になったと思う。たとえば、「GPA導入」や「アドバイザー制」などに関しても、今後本学で踏み込んだ議論をしていったらどうかを思う。

所属： システムデザイン工学科

氏名： 高 三 徳

諸星先生の基調講演から、日米の大学のたくさんの事情(問題点とその解決策)を知った。たとえば、米国で学生GPAが自動車保険料率と関連していることは初めて聞いた。車社会の日本でも、このようなシステムがあれば良いと思う。もう一つ印象に残るのは、図書館の重要な役割および授業と図書館の関連である。本学に全国屈指の図書館があるが、利用者が少ない。これから自分の講義や卒研指導の中で、学生に図書館を利用させる宿題、課題を多く出したいと考えている。また、この講演で日本の大学における問題点を聞きながら、大学教員の一人として責任感、危機感、使命感をいっそう高めた。

山崎先生のレクチャーから、教育目標記述のための具体的な動詞を学んだ。今後自分の担当科目のシラバス修正に活用できると思う。

諸星先生のレクチャーから、シラバスは教員と学生間の契約書である重要さに対する認識を高め、自分の担当科目のシラバスの再確認・修正の必要性を感じた。

グループ討論では、多学科の教員がお互いに「〇〇さん」と呼び、積極的に役割を担当し、共同作業がよくでき、学部や学科の壁を越えて交流と理解も得た。「〇〇さん」の呼称は今回共同作業

成功の要因の一つであると思う。

このFD研修会は本学の教育改革、生き残り、そして発展に大いに役立つと思う。特に、「教育学」、「教育方法論」のような科目を受講しなかった工学系教員の私として、このようなFD研修会は極めて貴重な機会である。今後のFD研修会にも積極的に参加していきたいと思う。また、FD研修会で学んだものを確実に教育活動に活用していきたいと考えている。

所属 システムデザイン工学科

氏名： 桜井俊明

全学的なFD研修会が実行され、基調講演やワーキング作業があり、参加してよかった。

基調講演の内容には、本校が解決せねばならない示唆が多く含まれており、FD活動に止まらず、経営や教育、研究、評価などに今後役立てていくべき項目があった。なお、講師の方の主張は米国における学問、経験、実践などに基づくものであり、参考にするときは日本の教育状況を踏まえ、吟味して行うべきである。

ワーキング作業では、他学科の教員の方と共同作業ができ、あまり機会の無い我々にとって、有意義な時間であった。また、発表からも、よいヒントが得られた。

全般的に貴重な経験であった。開催に当って、委員会の方々をはじめ携われた方に感謝いたします。

なお、本FD研修会を開催できた底流には、1999年から2003年までIMU授業フォーラム、2004年からのFDフォーラム、FD委員会活動における教職員の地道な努力があったものと思われ、諸先輩の努力の結果であることを付記しておきたい。

所属： システムデザイン工学科

氏名： 清水信行

大変有意義であったと思います。

教員に対するこの種の研修はこれまで殆んどなかったのが、少し残念な気がしました。折にふれ、このような研修会は必要だと思います。

FDの重要性、特に学生の質の保証を具体的にどのようにして確保していくかということは、このような活動を通じてのみ達成されるものと感じました。

所属： システムデザイン工学科

氏名： 高橋義考

学生指導の大切さを再認識いたしました。また、シラバスの大切さも再確認いたしました。

しかし、キックオフ・レクチャー1の「医療系教育におけるカリキュラム立案法」については、時間的に短く、十分に理解することができませんでした。そのため、午後のグループ討論でシラバス作成の時に、レクチャーの内容を反映させることができなかったと思います。

所属： システムデザイン工学科

氏名： 田中勝之

諸星先生の基調講演が非常に分かりやすく、現在の自分の行っている教育に対する姿勢を考えさせられた。たしかに自分は、人にもものを教えることを習ったのか？と言われると、習ってはならず、自分自身が学生時代に教わった方法をフィードバックしていることが多い。ただ、その方法は、自己満足ではあるが自分自身の成長につながったと思っているので、活用することになっている。しかしながら、本学の学生の学力は低いので、学生の目線に立って教育を考えていかなければならないことを再認識して、努力していこうと思う。学生の目線に立つには、学生の理解度を逐次確認することが必要不可欠であり、コミュニケーションを重視して教育に取り組みたいと思う。

グループ討論では、課題1の「いわき明星大学へのニーズとは何かそして、その対策は？」に取り組んだが、課題を検討する上で、これまでにおける本学に対する近隣高校や住民との関係の話などをベテランの先生方から聞くことが出来たことが非常に有意であった。

このFD研修会では、講演を聴くだけでなくグループによる討論をすることができたので、あらためて教育について積極的に考えることができ、役立った。

所属： システムデザイン工学科

氏名： 橋本真也

基調講演やキックオフ・レクチャーは、受講教職員においては、それまでに耳にしている事柄も多々あったかと思いますが、大きな刺激を受けたことは確かであります。それらは性格上、全体として理念を中心に述べられたように思います。それを基調として、グループ討論がなされ、各グループとも活発な意見が出されたと思います。しかし、各グループの発表に向けた完成行程にあたって、講演でたたき込まれたはずの理念が具体的な形で表現できたかということになりますと、従来見様見まねでシラバス作りをしてきた時点と同じ心境に戻って、一歩くらいは進んだかもしれませんが、二歩も三歩も成長したようには感じられなかったように思われます。

研修会として、反省を述べさせていただければ、グループ討論の代わりに、講師の先生にお願いし、受講教職員から出されたテーマ（科目）に基づいたシラバス作成の一部始終を、受講教職員の眼前で、質問をさせて貰いながら、1時間半程度で実演していただければ、研修会としての感動が高まり、シラバス作りに直接応用できる技術（センス）を目の当たりにすることができたのではないかと思います。

私たちの欠点は、問題のえぐり方、表現に際しての技法を具体的に知らないことかと思っておりますので、次回以降では、このことが検討材料になればと思っております。

所属： システムデザイン工学科

氏名： 東 之 弘

- (1) 諸星先生の講演は、非常に現実的で、本学にあった良い話であった。この話を現実としてとらえた教員が何人いたであろうか？おそらく半分は、人ごとのように考えているのではないかと推測される。
- (2) シラバス作成のワークショップは、非常に有意義であったと思う。実際に取り組んで、薬学部の先生がシラバスの勉強を良く行っていたのが、発言や行動で良くわかった。科学技術学部や人文学部の先生も、まともな教員はシラバスの意義や、書き方を勉強しなければ、これからの時代は許されない事を学習したはずである。

所属： システムデザイン工 学科

氏名： 安 野 拓 也

基調講演は、たいへん良い話を聞かせていただき、現在の大学が抱える問題がよく理解できた。午後のシラバス作成については、もう少し時間を設けて、じっくりと説明してもらいたかった。また、グループディスカッションは、与えられた時間でまとめるには課題が多すぎたように思える。しかしながら、大学全体でこのような研修会を行えたことについては、大いに評価したい。学部の壁を飛び越えて、現在、本学が置かれている状況や危機意識を改めて認識できた良い機会であった。

所属： 生命環境学科

氏名： 岩 田 恵 理

非常にためになりました。

所属： 生命環境学科

氏名： 梅 村 一 之

諸星裕先生の講演「我が国の大学の致命的な欠陥」のなかには、いわき明星大学が、今後の大学運営および教育の方向性を定めるうえで、参考あるいは教訓とすべきキー・ワードが多々含まれていたように思います。こうした研修会の効果が一朝一夕に現れるものではないとは思いますが、今後も地道に継続してゆくことが、いわき明星大学の大学教育の向上へと繋がるのだと思います。

また、いわき明星大学の学生教育の主軸(基礎教育、教養教育、専門教育、キャリア教育、さらに教育と研究等々)をどう位置づけるのか、個々の教員間にもそのスタンスには違いがあるように感じます。こうしたスタンスの相違があるなかで、いわき明星大学の教育の主軸を何処におくのかも問われているのかと思います。

所属： 生命環境学科氏名： 江 尻 陽三郎

諸星先生の講演をはじめとして、全体的に意義のある研修会であったと思います。

所属： 生命環境学科氏名： 佐々木 秀 明

これまで大学における教授法について学んだ事が無かったため、本研修会への参加はたいへん貴重な経験となった。外部講師として登壇いただいた諸星先生の講演はたいへん刺激的であり、外部の方にいわき明星大学を客観的に見てもらう事は重要であると感じた。いわき明星大学のミッションとは何かを考えていかなければならないと感じた。

諸星先生の講演で、シラバスは学生との間の契約書であるという話があり、シラバスの重要性を再認識する事が出来た。

また、多くの教員といわき明星大学の教育に関して討論出来た事もたいへん有意義であった。他学部他学科の教員との討論は新鮮であった。時間的な余裕が無かったため、次回は時間をかけて討論が出来ると更に良い結果となると感じた。

所属： 生命環境学科氏名： 佐 藤 健 二

初めての本格的なFD研修会でしたので色々な意味で刺激を受けました。とても良かったと思います。

所属： 生命環境学科氏名： 鈴 木 薫

初めてFD研修会に参加させていただきました。他学部で行われていたのは聞いていましたが、実際に参加してみてFD研修会の内容について理解ができたように思いました。

全教員が参加して行うことで、他学部の先生方の意見等を聞くことができ大変有意義な時間を過ごすことができました。また、短時間で集中して物事を考えることで、大学のこと学生のことなど改めて考え直すよい機会にもなりました。

基調講演およびキックオフ・レクチャーでの諸星先生と山崎洋次先生のお話をお聞きし、他大学の学生への対応や大学経営の構成の特徴、授業を行う上での留意点などその多種多様性について知り得ることができたと感じました。

課題1についてグループ討論しましたが、発表会ではどのグループの内容ともに基本的には同じ考えでいられること、大学として如何にその問題に対応していくのかが大切なのだということが分かりました。

大学へのニーズとは何か、そしてその対策は？というのは大変重要な課題であることを全教員が自覚していることは確かであり、今後このFD研修会で得たこと、やらなければならないことを的確に実行していくことが必要であることが、今回のFD研修会に参加して認識できました。

所属： 生命環境学科氏名： 楊 仕 元

従来の講義要綱とシラバスとの違いがいまひとつよく分からなかった。シラバスの語源を英語（独語、仏語の可能性も捨てきれなかった）と見当づけ、それらしい綴りを思い巡らせながらやっとなこと英和辞典で syllabus を見つけてみると、そこには「(講義などの) 摘要、要目、時間割・・・」と出ていた。これでは講義要綱と何ら変わらないではないか、なぜシラバスと気取る必要があるのか、と以来鬱々としていた。

今回の研修会の基調講演で、シラバスとは「教員と学生との間の契約書である」という視点が提示され、この限りにおいて、ようやく腑に落ちた。

(それにしてもカタカナ語はまことにナンカイ、キッカイ、ヤッカイである)。

所属： 生命環境学科氏名： 吉 田 喜 孝

グループ代表者・高橋氏からの報告に記載されている事の通りです。

所属： 表現文化学科氏名： 青 山 照 男

1. 基調講演（諸星氏）は刺激的かつ instructive であり、たいへん良かったと思う。
2. 限られた時間にいろいろな作業を詰め込んだため、時間不足・消化不良の部分が見られたのではないかと。
3. FDの重要性は理解できる。今回のようなトップダウンによる実施、ワークショップ形式の研修会以外にも、さまざまな方式が試みられても良いのではないかと。
4. 学部・学科により、置かれている状況（学問分野の特性、定員の充足率、地域との関係など）は異なる。昨年度の薬学部単独で行われたFD研修会のような、学部・学科ごとのFD研修会も今後必要になってくるものと思う。

所属： 表現文化学科氏名： 今 泉 瑞 枝

講師の先生の講演を興味深く拝聴しました。スケジュールや、進行も要領がよくて、長時間の活動がこなせたことを関係各位に感謝しております。また、シラバスの書き方について、これまでのやり方にどのように訂正を加えるべきか解かりました。グループの若い先生方が積極的に仕事を引き受けてくださったのも嬉しいことでした。今後の教育活動に生かせるものを多々吸収できたと思います。

ただやはり、長時間の拘束には抵抗があります。いくつかの事項は前もって書面配布で説明したり、グループ発表は三分の一ぐらいの数にする、その他の工夫を加えて、午後いっぱいとか、もう少し短い時間でこなせるようにならないものかと考えております。

所属： 表現文化学科

氏名： 上野俊一

諸星氏の講演の一方的なアメリカ礼賛に賛同する人はほとんどいないであろうが、アメリカの大学や小・中・高の教育における多くの様々な問題についてまったく話されなかったのは残念であった。

また、なぜ、ミネソタ大秋田校がうまくいかなかったのかについて、その当事者としてのお話をぜひともお聞きしたかった。失敗から何を学ばれたかというお話であれば、とても有意義な講演になったと思う。

GPAについても、アメリカでさえ賛否両論があり、むしろ、最近はあまり重視しない傾向にある。なぜ、再びGPAなのかも疑問である。

この講演を拝聴し、現在のグローバリズムの中、日本の大学はやみくもにアメリカの真似をするのではなく、日本にある大学として、その独自性を高めていかなければいけないということを考えさせられた。日本には長い教育の歴史があり、それが日本の文化や社会を形成してきた。教育の結果として生み出された日本社会は世界から多大な尊敬を受けている。はたして、アメリカの教育が生み出したアメリカ社会は世界から尊敬されているのであろうか。

明星の進むべき道が少し見えた講演であった。

所属： 表現文化学科

氏名： 大内和子

今回の研修会は基調講演、レクチャー、グループ討議、発表会と盛りだくさんでしたが、研修内容が互いに関連し合っており、配列や時間配分も適当だったためか、FDについて纏まりのある経験ができた手応えがありました。基調講演では、諸星先生が本学についての具体的なデータや情報をHP等から前もって周到に収集され、それらに基づいて話をされたのが印象的でした。自分の大学について日頃からあのくらいの関心（知識と問題意識）をもっていれば、いきなり「課題1」のようなテーマを与えられても、威勢のいいアイデアを列挙するにとどまらない提言ができたかもしれないと思いました。カリキュラムとシラバスをめぐる2つのレクチャーは、「人にもものを教えること」をまともに習っていない私たちが教育に携わるにあたり、最低限なにをわきまえ考慮すべきかについて、精神論や抽象論ではなく、具体的な手続きの形で示してくださったのが参考になりました。グループ討議については、上述の点のほか、短時間ですべての作業内容をこなそうとするあまり、議論を戦わせたり課題を批判的に検討し深めるというよりは、結論を出すことにこだわりすぎたのが反省点です。発表を聞いた限りでは、「課題2」のグループも含めどのグループにも似たような傾向が見られ、ディスカッションというものの案外な難しさを実感しました。それでも学部学科を越えた先生方と大学教育について課題を共有して話し合い、その内容を発表し合ったのは貴重な経験でした。「皆さん他人事のように考えているのでは」との厳しい講評もいただきましたが、講演や報告を謹聴するのがメインだったこれまでの研修会に比べれば、格段に当事者意識と連帯感が持てたのではないのでしょうか。これをその場限りに終わらせないよう、自分のシラバスを作り直す作業からさっそく実践しようと思います。

所属： 表現文化学科

氏名： 大橋 純一

まずは前半の基調講演を通して、本学の置かれている現状を知り、危機感（それとともにささやかな可能性）を共有できたことが大きかったのではないかと思います。お話しいただいた様々な実践例からも、改革に向けての多くのヒントをいただきました。全てを一気に消化し、状況を一変させるのは難しいことかもしれませんが、今回は、そのきっかけをいただいたということ自体が貴重であり、意義深かったのだろうと考えます。

また、グループ討論では、メンバー同が、学部・学科の垣根を越えて、共通テーマに深く関わることができることができました。中でも、Jグループでは、「就職・労働」といった、その分野ごとに少なからず取り組みに差がある難しい検討課題ではありましたが、それぞれが所属や立場を違えても、共通の認識を持って対することが十分可能であることを学びました。

最後に、研修資料の作成をはじめ、テーマ設定やパソコンフォーマットの事前準備、当日の司会進行などなど、実行委員の方々の至れり尽くせりのお気遣い、そしてご尽力に心より感謝申し上げます。

所属： 表現文化学科

氏名： 奥村 賢

今回の研修会については、以下の感想をもった。

①大学において教員に教育力や教育法の向上、改善が要求されるのは、自明のことであり、そもそも大学教員であればこのことを自覚していない者はまずいないであろう。ただし、教育力や教育法の内実が画一的に指示できるものでないこともまた、自明のことである。したがって、今後、この種の議論を有効に発展させようとするならば、少なくとも学科ごとの議論へと収斂させる必要があるだろう。

②次に、今回の講演およびワークショップに関する具体的感想だが、とりわけ感じたのは、思考対象の枠組みが一方的にすぎないかということである。それは、ひとつは学生についての想像力があまり働いていないのではないかとと思われるからである。教育は教員だけで成り立つのではなく、受け手である学生が存在することによってはじめて成立する。たとえば、ワークショップであらたに提案された授業科目についていうなら、授業の内容については細かく説明されたが、むしろ重要なのは、提示された授業を学生がどういうふうに関心を持てるのか、換言すれば、その科目にどれだけ興味をおぼえるのかという検証があまりなされていないことである。たとえそれが訓練のための仮設的科目であったとしても、学生が関心を示さない内容なら、あまりにもその場つなぎだけの話になってしまうのではないだろうか。いずれにしてもどういう教育をおこなうにしろ、その実効をはかるには、前提として学生の現状（社会面も精神面も）を的確に把握することが必須で、具体的な教育論はこの実態との関係をつねに見据えたものでないかぎり、砂上の楼閣となるだろう。もうひとつは、今回紹介された方法論は、あくまでもアメリカで生み出され、練成されたものであり、同じ手法をわが国にそのまま移植させることが、果たして適切かどうかということである。この点についての議論がまったくなされていないことも不安材料として残った。

③最後に、今回の研修会をとおして根源的な疑問も抱いた。今回の内容は教員の役割を教育のみに焦点をあてるものだったが、もともと大学教員にとって教育と研究ははたして画然と分けられるものなのかということである。FDと正面から向き合うためには、まず、この点を理論的に整備することが急務であるように思われる。

所属： 表現文化学科

氏名： 小池久恵

諸星先生の講演は、とくに大学院のあり方や学部組織を考えるうえで興味深くうかがいましたが、研修全体の時間が長過ぎたように思われます。今後も継続しておこなわれる研修ですので、形式にこだわらず、実質的・実効的な内容をもつ短時間集中型の研修にさせていただきたいと希望します。

所属： 表現文化学科

氏名： 斎藤正昭

諸星先生の基調講演がすばらしかった。耳の痛いことは多く、少し首をかしげる点（教授者作成のテキストの軽視等）もあった（しかしそれも、先生のお立場からすれば当然と思われれます）が、全体的に本音・本質の所を直に聴講できたことは何よりの収穫であった。大学という特殊な組織の一員としてのみならず、教員としての自己のあり方を直視する一助になったこと、そして将来の本学の展望を切り開いて頂いたことに素直に感謝申し上げたい。

キックオフ・レクチャー2の最後で述べられた「地域性から考えれば、ここは独占企業」という言葉は、本学に対するエールであり、教職員全員が重く受け止めるべきであろう。ちなみに懇親会で、先生は「もし本学の経営を任せられたならば、真っ先にいわき在住受験者の授業料割引を実施する」と述べられた。これも大いに傾聴に値する提言と思われる。

所属： 表現文化学科

氏名： 佐藤一昭

第1に、講演会の講師があまりにもアメリカかぶれであったように思われます。日本とアメリカでは事情がかなり違うにもかかわらず、物事をアメリカの観点からしか見ていないように思われます。たとえば、アメリカのPHDと日本の博士では、内容が異なるが、彼は同じ観点からしか見ていない。PHDはPHDであるにすぎない。日本の文科系では、有力大学から博士号をとることは、容易ではなかった。その上、就職口も限定されるために、多くの日本人は、博士号をとることに逡巡してきた。一方、アメリカでは、一般に学部は教養課程で、大学院ではじめて専門科目を学ぶという状況である。したがって、企業などからの求人も多く、学生はよりよい機会を求めて大学院に進学します。日本とは事情が大きく異なります。アメリカでは、有力大学からMBAをとることが、企業で成功するためには不可欠ですが、日本では、あまり問題にされない。

それから、日本はムラ社会で、「和をもって尊し」とされる集団主義の社会です。一方、アメリカは、個人主義の社会であるために個性が尊重される。日本が戦後、経済的に成長したのは、日本人の生活様式に基づく日本的経営を重視してきたからです。現在の日本の諸問題は、あまりにもアメリカ一辺倒であったからだだと思います。日本人の品格を忘れたために、現代の諸問題が起きたと思います。教育現場の問題もこのことに起因していると思います。しかし、今回の講師は、日本人の品格を忘れていたように思われました。古きよき日本を思い出すべきだと思います。

第2に、教員の専門分野がかなり異なるために、チームワークを組んでも意見がなかなかまとまらないように思われました。専門が異なれば同じテーマでも考えがかなり異なります。みんな一緒にという考えでは、かなり問題があると思いますので、各人の学会での研鑽に期待すべきだと思います。

第3に、研修会が、急であったために心の準備ができておりませんでした。それゆえに、思ったことの半分も言えませんでした。

所属： 表現文化学科

氏名： 仲村渠 哲 勝

強い者が勝つという考え方には賛成できない。それよりも弱い者の心を知ることが重要だと思います。会議が少ないほうがよいとか、出席を重視しないという考え方には賛成です。

アメリカ式の遣り方が最善の方法だとは思いません。日本には日本流の遣り方があると思います。

所属： 表現文化学科

氏名： 能 地 克 宜

はじめての試みということもあり、戸惑う面も若干感じられたが、会の盛況という点では概ね良好であった。特に、私が関心を寄せた点は、基調講演にあった「高大連携」の拡大と「学部間」の連携である。いずれも、今後進学してくる学生にとって魅力的な内容であると感じた。また、「グループ討論」において、普段容易に接する機会の少ない諸先生方と一つの問題を解決していく上で意見を出し合っていくことは、「FD研修会」という枠組みを超えたレベルにおいても十分必要な取り組みであると感じられた。私は当日、この「グループ討論」の発表者であったが、質疑応答を通して、次第に二元的な視点が現状では欠如しているのではないかというように思うようになった。将来に対するビジョンを持ちながら現状の危機を脱する方法として、確かにシステムティックな体制を確立していく必要性はある。しかし、そのような制度の中に学生を回収しようとした際に、そこに回収されずに逸脱していく学生に対してもフォローが必要なのではないだろうか。私たちはモノに向かって授業しているのではなく、人間に対して行っている以上、どんなに完璧な制度（と思われるもの）であってもその完璧の限界を意識すべきなのではないだろうか。理想の大学の実現にあたり必要なのは、完成度の高い枠組みを目指すという「上」からの目線と、例えば、当日発表させていただいた「挨拶」を基本とするような学生と接する上での「下」からの目線という二元的な視点を持つことだと思われる。この研修会に参加したことで、教員は「教える」（上から押し付ける）者（teacher）ではなく「引き出す」者（educator）であるべきというかつて私が教わった言葉、そして現在も日々心掛けているその姿勢が、少なくとも誤った方向に導くものではないということの間接的に保証できたという点で実りある一日だった。

所属： 現代社会学科

氏名： 五十嵐 幸 一

今回のFD研修会は全教員の参加という、いままでにない試みであり、非常に新鮮味を感じた。諸星裕氏のインパクトのある講演に始まり、グループでのシラバス作り、そして発表と非常にタイトな日程ではあったが、それが逆に緊張感を醸しだし、日程終了後には、ほどよい充実感を得ることが出来た。

特に、グループ討論および発表では、普段一緒に仕事をする事のない教員同士が、真剣に話し合い、知恵を出し合うことにより、ひとつの課題を解決していくということを行った。結果の出来不出来はあると思うが、共同作業により、メンバー相互の教育に対する熱意がひしひしと感ずることが出来た。このことが、今回のFD研修会の最大の収穫であったと思う。個人個人が同じ目標に向かって努力していくことが成果を生み出す事を実感した今、この熱が冷めないうちに、いわき明星大学全体の目標について改めて確認し、全学をあげて一刻も早く具体的に取り組むことが必要ではないかと考える。

所属： 現代社会学科

氏名： 井澤直也

諸星裕氏の大学経営マネジメントの講話は非常に興味深く聞くことができた。旧態依然の大学経営しか知らない教員が多い中、刺激のある内容になったとおもうが、実際それらの教員がどれほど自覚的に、今後求められる大学を目指していくのかについては疑念を持たざるを得ない面があることも事実である。

当日の日程的なことを言えば、かなりぎちぎち固められており、少しの余裕もなかったことが今後の課題であること。また議事内容がすべて企画者の方から定められており、参加者が主体的に考える運営する場面がもう少しあってもよかったのではないかと。

諸星氏が冗談のようにいっていた講演料など、FDの予算に関する問題であり、各学部、全体会議などの予算取りと配分の問題が将来的な課題となると思う。

所属： 現代社会学科

氏名： 石丸純一

基調講演のかなりストレートな指摘は、おおかたの教員が日頃感じている幾つかの問題点を明確にする上で参考にはなった。ただ、講演者のご自身の経験をベースに話されたアメリカ型のモデルは、それ自体としては興味深く参考になる点もあるが、制度や精神風土の違う日本において、とりわけ文部科学省の規制の枠でがんじがらめになっている日本の現状において、また本学や本学苑の置かれている環境において、どこまで応用可能なものか、あるいは必要性があるかについてはかなり検討を要すると思われる。

グループ討論は、学部・学科の異なる教員同士の相互理解と共通認識の醸成の第一歩として有意義であったと思われる。

所属： 現代社会学科

氏名： 茨木竹二

- 1) 「基調講演」では、専らアメリカの特定大学が引合いに出されたが、国外の大学を引例するのであれば、もっと歴史の長いヨーロッパの大学を、むしろそうすべきである。
- 2) 「カリキュラム立案法」と「シラバスの作成法」は、専ら“自然（科学）主義”や“実証主義”、もしくは“プラグマティズム”のパラダイムに基づいていたようであるが、それでは大学教育に偏向や画一化が生じる惧れがある。
- 3) グループ討論（課題Ⅰ）では、資料が何ら用意されなかったが、例えば今年度の「新入生アンケート」や他に受験業者のデータなど、（特に作業1で）提示されるべきであった。また、その際（作業2）の②方略や③実行計画は、本来社会政策学（特に教育政策論）の課題であって、大学の教員だからといって専門家でない者が、しかも短時間で行なえる作業ではない。

所属： 現代社会学科

氏名： 上野直紀

第1回FD研修会は集中授業(スキューバ)と日程が重なり、参加することができませんでしたが、補講日を設けていただき参加することができました。

諸橋裕先生に「我が国の大学の致命的欠陥」についてのビデオ映像は残念ながら音声不良などにより十分に理解することができませんでしたが、田中副学長よりの趣旨説明により理解が得られました。

自分も明星学苑(日野キャンパス)に奉職して30年以上経ちますが、教育方針とリンクしての授業展開は不十分であった気がいたします。

今後、体育開講種目を通して「体験教育」の実践を念頭に置き、シラバスも学生本位に進める必要性を感じました。

所属： 現代社会学科

氏名： 大橋保明

日米両国での豊富な経験にもとづく諸星氏の講演は、1時間半という時間を感じさせず、本学の取り組みへも示唆するところが多かった。シラバスや授業の改善といった個人レベルの取り組みからGPA判定やアドバイザー制度の導入など組織レベルでの取り組みまで幅広く指摘されたが、これら両方をうまくかみ合わせてFD活動を展開していくことが重要であるという思いを強くした。

学部を越えて教員同士の意見交流が図られた点も良かったが、今後は職員も含め全教職員で共通認識を持って進めていくことが大切ではないだろうか。

所属： 現代社会学科

氏名： 鎌田真理子

教員も増え、学部交流の場もないため、よい機会になりました。

また、今回の研修内容も概ねよかったですと思います。

所属： 現代社会学科

氏名： 神山敬章

初めての試みとしては成功だったと思います。企画運営された学長、副学長、実行委員の皆様お疲れ様でした。

大学全学部の教員が一堂に会し意見交換の機会を持てたことはいいことです。これからも機会をみて実施していただきたいと思います。学部や学科だけだと他学部の意見や方向性が掴み取れないこともあります。各委員会でも学科の意見が誤解され伝わることもありますから。

所属： 現代社会学科氏名： 菅野昌史

今回のFD研修会は有意義なものであったと思います。GPAの効用や医療系教育におけるカリキュラム立案法について具体的なイメージをもつことができるようになりました。しかし、それらの全面的な導入については、さらに議論が必要だと感じました。なぜなら、現時点における本学の多くの学生を考えた場合、かなり厳しいハードルを課すことにつながると思うからです。導入に向けては、はたしてそれが本学へのニーズ（とりわけ学生のニーズ）と合致しているのか、学生への調査等を含め、更なる検討が必要ではないでしょうか。本学を取り巻く状況は厳しいものがあります。しかし、今回のような学部の垣根を越えた議論を継続し、全学のコンセンサスを形成することが、大きな変革を成功させる上で重要なことだと思います。

所属： 現代社会学科氏名： 菊池真弓

今回のFD研修会は、これまでの講演等を受講することを中心としたプログラムではなく、講演およびレクチャーを踏まえた上で、グループ討論およびグループ発表につなげていくといった演習を積極的に取り入れた興味深いプログラムであったと考える。

所属： 現代社会学科氏名： 叢小榕

いろいろな意見を聞き、これまで当たり前とされてきたことを含め、さまざまな問題について検討し、自身の教育や研究の現状について反省することによって、今後の目標がより明確になった。

所属： 現代社会学科氏名： 高木竜輔

補講という形で10月7日（水）に参加した。講演会自体は大変興味深い内容であり、たとえばGPAについては、そのまま導入するには問題があるかもしれないが、導入すればいろいろな点で活用できると思う。他大学との単位互換や市民に開かれた大学というコンセプトなど、できることからでもやってみてはと思う。

ただし、前半の講演会の内容と、後半のシラバス作成がまったく関連しておらず、無意味に感じた。また、シラバスの作成について疑問が残る。通常教員がシラバスを作成するとき、一般的に講義タイトルと大まかな内容が決まっているものである。にもかかわらず、講義タイトルや内容を作成するところからグループワークをおこなうのは現実的な研修とは言えない。むしろ、自分が担当している科目のシラバスについて、講演会で紹介されたやり方で修正し、それをグループごとに報告しあう方が生産的である。

最後の感想としては、教員の教育上のスキルはその人のキャリアによって異なり、それゆえベテランの教員と新人の教員とでは、さらに学問内容によっても、求められる研修内容が異なるはずである。一律の研修ではなく、各人のおかれた状況にあわせた研修が求められると思う。

所属： 現代社会学科

氏名： 土田 節子

- ・ GPAの制度とその用途の具体的な例の説明に興味を持った。
- ・ こうしたGPA制度は学力向上に有効な制度であり、学習支援体制の確立が必須と思った。
- ・ 他学科教員とのワークショップは多面的な意見交換ができ、実り多かった。

所属： 現代社会学科

氏名： 福田 幸夫

3学部の教員が参集して初めて開催されたFD研修会として、大きな開催意義があったものと思われる。今後のFD活動は、大学の運営にとっても重要な課題の一つであり、諸星教授の講演からも、示唆される面が多々あった。

本学の置かれた環境にも厳しいものがあるものの、長所を伸ばし、他大学との異なる独自性をFD活動により発展させることにより、生き残りが可能であると感じた。

グループ討議についても、1つの課題について、専門分野の違う教員が多角的な意見を出し合う機会はそうそうあるわけではなく、有意義な時間であった。自分はタスクフォースの役割であったため、積極的に討議には参加しなかったものの、いろいろな意見が出されたのには感心することが多かった。

次年度以降も、年間当初の予定にあらかじめ組み入れられた定期的開催が望ましいものと思われる。

所属： 現代社会学科

氏名： 柳澤 孝主

FDの重要性に関しては認識しているつもりであるが、今回改めて重要なことに気づかされた。特に、山崎先生の実践的なお話によって、シラバス作りには助かると思う。

所属： 心理学科

氏名： 大原 貴弘

基調講演での諸星先生のお話は興味深く、これからの大学のあり方についていろいろ考えることができました。

グループ討論においては、普段話をする機会の少ない他学部他学科の先生方と、いろいろと討論することができた点は良かったです。

ただし、グループ討論（あるいは研修会全体）を通して、何をどこまで習得することが要求されているのかについての「到達目標」が不明瞭であった点は、今後、検討する必要があると感じました。

所属： 心理学科氏名： 糟谷 知香江

基調講演が参考になりました。

所属： 心理学科氏名： 窪田 文子

時間の無駄なく計画されていて、内容の凝縮されたものだったと思います。FD委員の先生方をはじめ、準備に関係された皆様に感謝いたします。

社会情勢が変化してきている中で、大学の果たす役割、その中で担当して行く授業について改めて見直す良い機会になりました。

グループでのワークショップは、メンバー構成が学部をまたいだ編成になっていたのも、他学部の先生方と知り合う良い機会になりました。私たちのグループに割り当てられたのは課題Aで、内容がやや抽象的だったので、取り組むのが難しかったと感じています。やり方として、課題をあらかじめ割り振るのではなくグループで課題を選ぶことができたなら、もう少し主体的にかかわれたのではないかと思っています。

所属： 心理学科氏名： 末次 晃

今回の研修会は主としてシラバスに焦点を絞った内容となっていた。基調講演で示されたように、大学は教育目標であるミッションを策定し、それに基づいてカリキュラムを構成し、そしてそのもとで授業のシラバスを作成する。このような階層構造を持つモデルを提示されれば、シラバスの重要性は理解しやすいし、また、そこに含まれなければならない情報の必然性も納得できる。シラバスに対する理解を深めることができたと思う。

また、シラバスの持つ役割がそのようなものであるとすると、大学としてどのような教育を提供できるのか、その具体的な方法の提示、そしてそれらが着実に実行されているのか、を外部から客観的に評価できる体制を整備しておくこと、これが教育機関としての大学の義務である、と大学に対する社会的ニーズが変化してきているということであろう。

基調講演、二つのレクチャー、グループ討論と盛りだくさんの内容で、その結果、タイトなスケジュールの研修となったが、大学教育のあり方、さらには大学そのもののあり方を再考するよい機会となる、実りのある研修会であった。

所属： 心理学科

氏名： 田 多 香代子

諸星先生の基調講演は、現在のいわき明星大学に必要な、大学の基本理念に関わるご指摘があり、改めて考えを深めることができた。

分科会のセッションは、何をするのかという指示は了解したが、その時間を通して各参加者が何を獲得するのかという目的が不明確であったと思う。また、時間的に余裕がなかった。

大学の問題点と改革案、あるいは学部、学科を越えたシラバス作成という課題を討議するのであれば、まず、各学科からスタートし、学部レベル、そして全学での企画という段階を踏まえたブレインストーミングが望ましいのではないかと感じる。

シラバス作成は文言や形式的な内容にとどまり、本来のシラバス作成の理念とはかなりかけ離れたものだったように思う。

所属： 心理学科

氏名： 富 田 新

諸星先生の講演では、アメリカの大学や日本の他大学の教育に対する意識や取り組みについて知ることができ、大変勉強になりました。ミッションの明確化、契約（シラバス含）、客観的評価など、いずれもアメリカ的な価値観を反映したものだと思われませんが、現在日本で行われている教育改革の方向性は、まさにそういった価値観を体現するシステムを、大学内に構築することにあると理解しました。それが現在の日本の大学を取り巻く大きな流れであり、本学でもそういったシステム整備にしっかり取り組んでいく必要があると思われまます。一方で、そういったシステムの整備のみが、個々の学生の教育効果に直結するわけではないということについても、十分留意しておく必要があると感じます。教育目標を達成するためには、そういったシステムの中に用意されたものが、学生個々人に受け入れられ、活用され、機能するようになることが必要です。そのためには、“個々の学生のモチベーションを刺激するような教員側の働きかけ”や、“学生自身が自由に考え、また、自発的に問題に取り組めるような機会の設定”などが不可欠であるように感じます。結局は、私たち1人1人の教員が、学生との接点であるカリキュラムや授業をいかに構築するか、という問題に集約されるのかもしれませんが。次回以降のFDでは、そういったテーマ（“学生のモチベーションの喚起”や“魅力あるカリキュラム”や“授業設計の仕方”等）についても、是非取り上げていただければ幸いです。

所属： 心理学科氏名： 林 洋 一

諸星先生のご講演は、テレビ情報番組のコメンテーターとしてのイメージと異なり、インパクトがあった。アメリカの大学評価についての豊富な知識と経験は、十分聞くに値するものであった。講演内容それ自体は他大学で行われたものと大差ないようであるが、公開されているパワーポイント資料ではわからない詳細は、本学の教職員にも非常に役立つように思われる。

ただし、社会・文化的条件が異なる日本の大学、とくにいわき明星大学では取り入れることが難しい、ないしは必ずしも適切とは思われない事柄も少なくない。たとえば、GPAの利用法として「高得点者は、年間履修可能単位数の上限を増やす」という制度が存在することは、非常に興味深い。だが、このシステムでは、学生が「評価の数値に過敏になる」という弊害もあるようである。いわき明星大学では、取り入れにくいように思われる。

山崎先生のご講演も、医学教育という特殊な分野での実践ではあるが、非常に興味深いものであった。様々な教授法やシラバスについての考え方が生まれた背景も、よくわかった。

しかし、先生ご自身が「教条的との批判がある」と言われていたように、「目先の言葉」にとらわれすぎて点も散見される。さらに、大切なのはあくまでも「教授内容＝授業」である。

つまり、書籍で言えば重要なのは「中身・内容」であり、「目次」や帯封の「内容紹介・推薦文」がいかに立派であっても、それだけではあまり意味はない。それは、シラバスについても同様ではないか。求められているのは「授業の改善」であり、「シラバスの改善」はその一部として位置づけられるべきものである。

また、グループ・ディスカッションは、普段接することの少ない他学部の先生方とふれあう貴重な機会になり、面白かった。だが、時間的な余裕がないこと、やや扱いにくいテーマであったことなど、いくつかの検討課題があるのではないか。全体としてみると、内容が豊富なため、未消化に終わったところがあるのが残念であった。

所属： 心理学科氏名： 福 島 朋 子

諸星先生のご講話は非常に興味深いものでした。ミッションという言葉に示されるような、大学の方向性を明らかにしていくことの重要性を認識しました。また、大学の中心的な仕事は学生に教育などのサービスを提供すること、というご指摘もありました。学生により質の良いサービスを提供するためには、教職員に時間的・心理的な余裕もなければならぬと我が身を振り返り強く感じました。

諸星先生のお話をうかがうだけでなく、実際に桜美林大学を視察して、この目で確かめてみたくなりました。次回の研修会の企画の際に、ご検討いただければ幸いです。

今回のFD研修会は意味のあるものであったと思われませんが、大学全体の方向性の中でFD研修会の内容がどのような位置にあるのかがはっきりするとさらに良かったと思います。

所属： 心理学科氏名： 本多明生

- ① 初の全学FD研修会であったが、限られた時間内で学部の垣根を越えて「大学のニーズと課題」や「科目設計」について討論をできたことは良かったと思う。
- ② 基調講演を行って頂いた諸星裕先生のお話は興味深く拝聴することができた。昨今の大学を取り巻く情勢やその情勢に対して大学側がどのようにアクションを起こすのかについての具体的なアイデアを多く知ることができたのは良かったと思う。
- ③ グループ討論においては、時間が限られていたこともあり、具体的な内容や実現可能性まで検討できたものは限られていた印象を受けた。
- ④ もし次年度以降もこのような取り組みが継続して行われるのであれば、事務スタッフも参加したほうが望ましいのではないかと感じた。その理由としては、魅力ある大学を構築していくためには、教員だけではなく、事務スタッフの力の必要不可欠であるし、事務スタッフの意見やアイデアをもっと反映したほうがよいと思うからである。
- ⑤ 学生が面白いと感じる授業をきちんと評価し、その結果をフィードバックできるシステムが必要であると思った（Professor of the yearの設置等）。

所属： 心理学科氏名： 森文弓

基調講演の諸星裕先生の話が大変印象に残った。諸星先生は実際にアメリカの大学で教鞭を執られた経験があり、教育の現場で教員自身が自身の教育について評価されるという厳しい現実を体感されてきたわけであるが、そうした経験を生の声として語られた点が、非常に説得力があった。

シラバスの作成では、テーマについて班別に討議を行った。私はタスクフォースとして参加したが、活発な議論が行われたのはよかったと思う。ただし、シラバス作成をまとめきるには時間がやや足りないという印象を持った。

所属： 心理学科氏名： 吉川吉美

講演のテープは大変参考になりました。
ワークは意識性も高まるので今後継続すると良いと思いました。

所属： 薬学科

氏名： 板倉 敦子

全学で開催される初めてのFD研修会でしたが、残念ながら当日は都合がつかなかったため、後日開催された補講に参加させていただきました。諸星先生の基調講演の評判を伺っていたのでDVDにて拝聴できることを楽しみにしていたのですが、音声の調子が悪く殆ど聞き取れなかったのが非常に残念でした。本大学にとっては耳の痛くなるような内容もあったようです。変革は容易なことではないと思いますが、少しずつでも改善していかなければ今後大学が生き残っていくのは難しいのではないのでしょうか。教員と職員がそれぞれプロ意識を持ち、連携してより良い大学づくりに取り組まなくてはならないのだということを改めて感じました。

薬学部では既に数回FD研修会が開催されSGDにも参加していましたが、他学部の先生方とSGDを行うのは初めてでした。薬学部の教員はグループ内で私一人でしたが、他学部の先生方はどなたもリードが大変上手で、短時間で成果を上げることができました。与えられた課題は「地域性に関連する授業」のシラバスを作成するというものでしたが、今後、市民講座を開講する上でこのシラバスが役立つことがあれば良いなと思いました。普段は薬学部以外の教員と接する機会はほとんどありませんが、学部を超えて交流を深めることができ良かったと思います。次回は職員の方もSGDに参加していただければ、より良いFD研修会になるのではないかと思います。

所属： 薬学科

氏名： 岩下 新太郎

本大学は立地条件として極めて恵まれた環境にあり創造性に富んだ大学となり得ると同時に「井の中の蛙」大学になる可能性が高いと思ってきました。そして赴任して以来2年あまりの間にも後者への流れが強まっていることに私は危惧を抱いています。その点で今回の研修会がいわき明星大学の直面している数年来の課題を考える第一歩となり得る可能性を示したことで意味があったと思います。

今回の研修会は諸星さんの率直な指摘にもあったように文部科学省、大学基準協会の評価のために設定されたものでした。即ち外部からの「圧力」がない限り自己点検できない、いわき明星大の状態を浮き彫りにさせました。このような背景のためでしょうか、研修会の目的が不明確だったと思います。議論のなかでこれは「Exercises」であるという説明発言がありましたが「何」の又「何のため」のExercisesなのでしょう。ここを明確にすることが大切だったのではないのでしょうか。練り上げられない内容をグループ討論成果として発表し、その細部にわたって討論するなど、このような曖昧な精神活動を繰り返していると物事を本当に深く議論できない精神構造の持ち主になってしまうことに気をつけるべきではないのでしょうか。関口学長が懇親会の挨拶で「久しぶりに頭を使って・・・」と述べられましたが、これは冗談であると信じます。

FDはあくまで大学が抱える問題の一つです。基本的な問題を議論せずにFDに“逃げている”のが日本全国の動きではないのでしょうか。大学を変革することは大変なことで、うまい話があり得るはずがありません。しかし真の議論の積み重ねこそが可能性を拓く力になると信じます。グループ発表にもあったように学生の弱点は多くの場合に教員の弱点の“映し”になっているのだと思います。コミュニケーション能力を学生に言うならば、教員が形式、外観を優先させるのではなく真の実質的な討議をすべきです。今回の研修会がその方向への一歩となることを望みます。

所属： 薬学科

氏名： 江藤 忠洋

今回のFD研修会は全教員が参加という形で行われるということで、開始前には不安と期待を込めた普段にはない緊張感を持っていました。研修会開始直後からの基調講演やキックオフ・レクチャーでは大変貴重なお話を頂き、今後の参考にしていければと思います。その後行われたSGDでは、普段あまり接する機会のない他学科の先生方と討論をするという貴重な機会を与えて頂き、とても有意義な時間だったと感じています。ただ、討論時間が短く十分な検討ができなかったこと、また課題が抽象的だったことが少し気になりました。我々のグループでは『適切なシラバスの作成』との課題のもとSGDを行いました。全学科の先生方が参加し入り混じってSGDを行うため課題の選別は難しいこととは思いますが、もう少し具体的な講義についてのシラバス作成を課題としないと中々実際に起きているもしくは起こり得る問題点に気が付き辛いのではないかと思います。また与えられたテーマに関する講義を作り上げるためのアイデアを絞りだすことに重点が置かれ御講演頂いた内容やプログラムに記載されている注意点や踏まえておくべき事柄に十分に注意をしてシラバスを作成できたかどうかは少し疑問を感じます。この点は自分自身の反省点として次回以降のFD研修会に生かしていきたいと思っています。

所属： 薬学科

氏名： 蝦名 敬一

諸星 裕先生の深い示唆に富んだ指摘を含む基調講演：「我が国の大学の致命的欠陥」とキックオフ・レクチャー2：「シラバスの意義と作成法」を拝聴し、いわき明星大学の生き残りのための取り組みの必要性を実感した。

また、FD研修会を終えて、あらためて我々教員一人一人が常に向上心をもって自らを高めていき、魅力ある教育を心がけ、日々の学習、教育に向き合うことの重要性を強く認識した。

所属： 薬学科

氏名： 大林 尚美

全学部のFD研修会とのことで、少々戸惑いを感じましたが、一日があっという間に過ぎてしまうほど充実した一日でした。

特に、諸星先生の基調講演は、少々過激な発言がありましたが、物事を見る視点やその角度を変えて解釈することで新しい発想、展開が生まれてくること、また、経験談を通して教員としての心構えやあるべき姿などを学ぶことができ、非常に貴重な時間を過ごすことができました。

グループ討論では、他学部の先生方との作業でしたが、専門が異なることから物事のとらえ方、発想などが異なり、同学部で行ったFDとは違い非常に新鮮であり、討論の内容や発表資料の完成度が高かったように思います。

最後になりますが、同じ大学で働いているにもかかわらず、お会いしたことがない先生方が多いことに驚きました。今回の全学部のFD研修会を通して、スモールグループディスカッションのメンバーの先生方の顔と名前を少なからず覚えることができ、そういった意味でも非常に得るものが多く研修会に参加して良かったと思いました。

所属： 薬学科

氏名： 鹿児島 正 豊

外部の方から見たいわき明星大学というものを、知ることが出来た事は大変有意義であった。内容については、全ての学部の先生方が、多大な時間を費やして行うものであるから、目標を絞ってSGDをしたら、もう少し異なったプロダクトが得られたのではないかと思います。

所属： 薬学科

氏名： 片 桐 拓 也

諸星氏の講演を聴くことができたこと、またその著書「消える大学、残る大学」を読むきっかけになったことが私にとっての大きな収穫だったように思う。また、以前から思っていたが、氏の講演を聴くことにより、いわき明星大学が今後発展するためには「おらが町の大学」の意識をいわき市民に浸透させ醸成しなければいけない、そうなるように教員と職員一緒になって努力しないといけないとの感をますます強くした。

また、他学部の先生方との意見交換により、日野の明星大学との交流を深めていくことで、多様性を増すなど教育上の利点が多々あること、また、学生間交流も盛んにすることでいわき明星大学の学生に都会での生活を体験させる「社会人予備学習」も可能になること、その他、クラブ活動交流、シンポジウム共同開催、など、受験生にとって、いわき明星大学をより魅力的な大学にすることが可能であることを考えることができた。

以上、2点について、それを可能にする方略を今後考えていきたいと思います。

所属： 薬学科

氏名： 川 口 基一郎

3学部の教員が同時に本学の置かれている危機的状況をクリアカットに指摘され、「何とかしなくては!」、「自分ならどうする。」といった機運が高まったように思う。

同時に他学部の面識の無かった方々とSGDを行い、コミュニケーションを計ることにより仲間意識が芽生えたので、今後の全学的な活動(教育改革等)にもスムーズに導入できる切掛けとなったと思う。また、優秀な方の多いことを実感した。

シラバスとは何か、教育とは何かはかなり明確になったので、これまでのやり方で良かった点は自信を持って推進し、悪かった点は直ちに改善したい。

タイムスケジュール的に内容が多過ぎ、消化不良な点もあったと思う。

所属： 薬学科

氏名： 菊池雄士

初めての全学FD研修会であったが、自分なりに十分な成果があった。午後からのグループ討議も何となく遠慮がちに始まったが、限られた時間内で内容の濃い討論ができたと思う。

グループ討論課題であったシラバス作成は、専門分野が異なる教員による討議であることから、「プロダクトの出来」に重点を置くというよりも、各教員の異なる視点からの物事の考え方を理解して取り入れ、一つの形にまとめる過程を大事にしようとする課題であったと思う。これまでは、担当するシラバスを自分一人ですべてを考えて作成していた。自分なりに、十分に考えて作成していたつもりであっても、他の人の視点を入れることで、より充実したシラバスにすることも今後の課題である。シラバスの作成にあたっては、何を教えたいか、学生にどのようになって欲しいかだけでなく、むしろ学生が何を習いたいか、どのようになりたいのかの視点の必要であると感じた。専門教員のみならず、職員、企業関係者などを含めて教育内容（シラバス）を検証する組織があってもいいのかもしれない。

諸星先生の講話は、本学の現状をどのように理解し、どのように変えていくかを考える上で参考になる点があった。まずは意識して考えてみたい。大学としてあるいは各学部としてのミッション、アドミッションポリシーの位置づけについては、正直なところ私自身で明確に理解し実践しているとは思わない。この点に関しては全学の教職員が共通認識を持つことが大切なのであり、詰め込みにならない継続的なFD、SDが必要であろう。

所属： 薬学科

氏名： 金容必

第一回いわき明星大学 Faculty Development (FD) 研修会に参加した感想は様々な情報を手にした充実感である。まず、諸星裕先生の我が国の大学の致命的欠陥をテーマとした基調講演があり、先生のアメリカや桜美林大学での経験を基に日本の大学における様々な問題や解決策は我々いわき明星大学でもそのことを生かしていける大事な内容であった。良い講演の話が聞けて大変満足である。私自身においても講演の話しから、講義や研究を行う際に見習っていける様々なアドバイスをもらったと思われる。楽しい時間であったし、勉強になった。さらに、グループ討論では1グループに属し、21世紀の諸課題に対する授業のシラバスを作成した。薬学部のFDの時とは違い他学部の先生と共にシラバスの意義と作成を共同作業で行うのは新鮮で、様々な考え方があると改めて感心していた。面白い体験でもあった。

ただ、一つもの足りなかったのはグループ討論の時間が短くて十分な討論ができなかったのが不満である。また、このような機会があればもっと長い時間で十分な討論を重ね内容的にも充実したシラバスにしたいと思う。しかし、短い時間でも討論は活発に行われ、完成度には不満を持ったものの良い内容のものができあがったのは非常に嬉しく思った。

このFD研修会で私自身が得たことは多いと思うし、これからの教育に活用していきたいと強く思った。

所属： 薬学科

氏名： 久保博昭

諸星先生の「我が国の大学の致命的欠陥」の講演を聴き、経験を踏まえた話はずけるところが多かった。また、時間が足らなく後半のGPAに付いての詳しい話が聞けなかったのは残念に思った。時間制限なしに話して貰えればもっと色々な裏話が聞けたのでは無いかとも思った。

山崎先生の「医療系教育におけるカリキュラム立案法」の講演を聴き、カリキュラム立案法の歴史が分かり、先人達がモデル・コアカリキュラムをどのように策定したか理解できた。

諸星先生の「シラバスの意義と作成法」の講演を聴き、諸星先生のシラバス作成における考え方は参考に成った。

グループ討論では「21世紀の諸課題に対応する授業」の適切なシラバス作成を1グループとして担当した。先の山崎先生、諸星先生の講演を聴き、また、薬学科はシラバス作成のFD研修を行っていたのでシラバスの作成は21世紀の問題点を決めて学習目標を設定してから順調に進んだ。授業名は「21世紀の地球を考える」でシラバスは時間内に作成出来た。

グループ討論では他学部の先生と会話のできたので充実した時間が得たものと思う。また、懇親会の時、諸星先生と桜美林大学の学生のレベルの話が出来て参考に成った。

所属： 薬学科

氏名： 倉澤嘉久

基調講演とキックオフレクチャーの内容は、目新しい内容が豊富で興味深いものであった。講演者の諸星裕氏は大学に於ける種々の講義方法、授業法により学生教育を工夫し、可成りの労力を費やしているようである。学部によっては教育の方法も種々あるものだと感服し、また勉強にもなった。本学の薬学部の教育に応用出来そうなものも少々ふくまれていたので、有意義であった。講演の中にあつたGPA制度も、項目を取捨選択すれば、本学でも学部によっては効力を発揮するかもしれない。

午後のグループ討論は、「いわき明星大学へのニーズとは何か、そしてその対策は？」について話し合った。2年半前に東京都内の大学から本学に転職して来た筆者にとっては、「本学へのニーズ」ということに対する盲点が多々有り、グループメンバーの討論を聞いて、成る程と思われる事が多かった。

「本学へのニーズは何か」については、主として、本学の立地条件（好環境）と地域性（数少ない高等教育機関）についての意見が多かった。本学勤務が長い方々は流石に良い意見をお持ちであった。

「その対策は？」については、大学の問題点（定員割れ）と入学生のレベル低下の対策について討論された。これは他大学と共通の問題で、本学で出来る事につて教員の立場で種々のアイデアや意見が出された。

午前午後にわたって、ともかく学生の教育に対するヒントを幾つか得る事が出来たという思いはある。

所属： 薬学科

氏名： 黒見 坦

第一回いわき明星大学 Faculty Development という教員研修会が、2009年9月8日に行われた。まず、基調講演として、桜美林大学、大学院教授の諸星裕氏の講演があった。題名は、我が国の大学の致命的欠陥というものであった。続いて、本学薬学部の山崎洋次学部長教授のキックオフレクチャー1があった。題名は、医療教育におけるカリキュラム立案法というものであった。その後昼食をはさんで、諸星裕教授のキックオフレクチャー2というものがあった。題名は、シラバスの意義と作成法というものであった。さらに、実行委員長の田中晴男教授によって、研修の進め方という講演があった。その後、8人の小グループに分かれて、グループ討論なるものを行った。われわれの討論の題名は、いわき明星大学へのニーズとは何か、その対策はというものであった。その後、各グループに分かれて討論を行った結果を発表するプログラムがおこなわれた。ここでは、小グループのAからKの代表者が発表を行い、その発表について、質問、提言などが行われた。さらに、課題いわき明星大学へのニーズとは何か、その対策はについて総合討論が行われた。次に、科目設計：適切なシラバスの作成；地域制と関連する授業、大学と地域の連携、21世紀の諸課題に対応する授業、職業意識と労働意欲を培う授業について、小グループからの発表があり、それについての個別の質疑応答があった。各発表がすべて終わってから、第二の課題についての総合討論が行われた。諸星氏の講演は、自分のアメリカ合衆国での経験から、日本の大学の現状を比較し、評価したものであった。また、日本の大学の組織運営、授業のあり方を分析、評価したものであった。全体的に、分析、評価が一方向的、極端な例をもとにして行われており、納得するには、遠いものであった。

所属： 薬学科

氏名： 櫻井 映子

今までに数回様々な所でFD研修会を経験したが、それぞれ趣が異なり興味津々で参加しておりました。今回は他学科の先生方に知り合う機会、考え方、視点の相違を知ることができ、SGD でも有意義な時間を過ごすことができました。

講師の諸星先生のお話は、私のイメージしていた講義をすでに実行されていて私にも実行可能であること、それを行うためのポイントなどが的確に提示されていて、大変参考になっただけでなく、背中をポンと押されたように勇気ができました。時代にマッチした情報を学生さんに還元するための講義には研究や学会参加が必要で、かつ、教育に役立つアレンジ力が要求されているように感じました。人を育てるということは子育てと同じで、理論・理屈だけではできないことが沢山あるので、研究だけではだめという発言はそんなことを意味していると理解しました。

大学の役割として、年齢を越えた知の楽しみを味わってもらうこともあると思います。問題は、地元で育ち生活してきた人々の記憶にある今までの偏差値のイメージが、現在の大学の価値観の理解の邪魔をしてしまうこと。ここに一つのセールスポイントの問題点があると思いますので、地域の人々に「大学の講義をのぞいてみませんか？」といった感じで広報し、学びたい講義を選んで聴いていただき、新たな価値観を作っていただくのも一つの手かもしれないなと思いました。

いろいろな学科のある総合大学なので、その学科でどんなことを学んでいるか、全ての学科が一目でわかるセールスポイントのイメージと大学の講義を聴けるということを地元チラシで配布して、元気なお年寄りなど地元の方を呼び寄せることは、学生を間接的に集める手段にもなるのではないのでしょうか。

所属： 薬学科

氏名： 櫻井 ルミ子

今回のFD研修は全学で行われた初めての研修会であり、他学部の教員間のコミュニケーションが取れた点において意義あるものであったと思います。

シラバス作成におけるグループディスカッションでは、討論テーマが専門分野ではなかったことから、ディスカッション内容としては難しく感じました。しかしながら、先生方が普段講義を行うにあたり、何を問題とし、またどのように改善すべきと感じているかについて、先生方の考えを知ることができました。今後、FD研修に限らず、このような討論あるいは相互意見交換によって、可能な限り情報や処置法などの共有化を図る必要があるように感じました。

諸星先生の講演を拝聴し、いずれの大学においても改革が必要であることを確認しました。本学においても、改革の必要性をあらためて感じています。そのためのFD研修は大いに意味あるものと感じますが、教育の初級者である私には、改革のための第一歩を踏み出す為の具体的な取り組み方など、まず何が必要なのが現段階では直ちに見えて来ません。FD研修会での内容に、より具体的な内容の講演やテーマの設定などをお願いしたいところです。

所属： 薬学科

氏名： 佐藤 陽

今回のFD研修会を通して、桜美林大の諸星先生から多くのことを学ぶことが出来た。これから少子化が続き、大学の全入時代にもなる先、大学が生き残れるか否かは非常に重大な問題である。いわき明星大学も定員割れが続き、今後何かしらの改革が必要になるのではないかと考える。諸星先生の講演の中で、いわきには大学が2校しかないこと、いわきの人口が37万人を考えると、すごく良い環境にあることは非常に納得するところである。そのためにも、やはりいわき明星大学が地域にいかに関与できるか、いかに地元に着した大学になるか…それが今後のポイントとなるのではないかと考える。

午後のグループ討論では、大学へのニーズとは何か及びその対策、シラバス作成法に重点が置かれた。私達のグループでは、前者に関して議論が行われ、大学がどうあるべきか、地域内外や日野の明星大学との連携等、多岐にわたり議論されたが、その後の全体討論を聞くと、今回はいわき明星大学の教育が今後どうあるべきかがテーマだったようだ。大学教育がどうあるべきか、また教員の教育へのモチベーションは極めて重要なことだが、先に述べたようにいわき明星大学が生き残るためにはどうあるべきかを全体で議論することも急務ではないかと考える。

所属： 薬学科

氏名： 佐藤直記

まずはFD研修会の準備等、関係教職員方々のご尽力に御礼を申し上げたいと思います。

午前中の基調講演は現状に目を覚まさせる意味で大変有益であったと思います。個々の問題は様々な要素が絡み合い即100点満点の答えが出るわけではありません。しかし教員自身に、かつ自身が受けた大学教育を踏襲するこれまでのやり方ではもはや通用しない時代であることを認識させ、時代の変遷に対応できない鈍感を自覚させるのには十分であったと思います。

午後の分科会については問題意識の共有化と解決への議論には意義があると思いましたが、私個人的には、よりよい分かりやすい授業、学生の意欲を引き出す授業など本来のFDの重要なテーマ（いかにして教員のポテンシャルを上げるか）からは程遠いものと感じました。以上です。

所属： 薬学科

氏名： 鈴木政雄

諸星先生の基調講演、山崎先生、諸星先生の教育講演で、心も頭もリフレッシュし、活性化された後、タスクホースとして、シラバス作成の研修に参加させて頂きました、タスクホースの役割が何で、どのようにしたら良いかを考えているうちに、グループの参加者の巧みな運営に身を任せているうちに終わってしまいました、様々な意味において、個人的には多くの勉強をさせて頂き、感謝しています。

討論の場（タスクホースとして参加したグループ）並びに、発表の場においても、発言スタイル、発表スタイルにおいても各学部の参加者のバックグラウンドの違いがあり、それを知るだけでも大変有益であった。

シラバス作成では、作成についての事前研修が必ずしも十分でなく、いくつかのグループに対して、指摘があり、次年度のシラバス作成にどのように学科長が指導していくかが、課題になるような感じであった。

また、総合討論を聴いていて、二つのグループとも最後のまとめまで、到達していないグループがあり、討論前、討論中の指導方法や運営時間の配分など、今後の研修会開催における検討課題の一つになると思われた。

今後の課題は、いずれも研修会が開催された事実と比較すれば、とるに足りないほどの小さいことであり、今後、いわき明星大学に必要とされる研修会を如何に継続していくかが問題であり、多くの教員が、「また」でなく、「是非」参加の気持ちになるよう育てて下さい。

所属： 薬学科氏名： 高橋 淳

諸星先生の講演で示された通り、そもそも大学は学生のための機関であり、教職員を庇護するための機関ではないと思った。そして、教職員は、(1) 教育活動にどれだけ貢献したか、(2) 研究活動にどれだけ貢献したか、(3) 学生の成長にどれだけ貢献したか、(4) 大学及び外部機関の発展にどれだけ貢献したか、で評価されるべきであり、上記4項目を達成することが、教職員の存在意義であり、任務であると強く感じた。

講義内容の工夫・改善も当然重要な議題ではあるが、教職員の、大学における存在意義についての意識改革も必要ではないかと思った。教職員は、「お客様」として接待されるために大学に招かれたのではなく、大学を発展させるための「駒」として配備された、という認識も必要ではないかと感じた。このような認識が確立されたならば、さらなる学生のための授業、学生のための大学発展が期待できると感じた。

所属： 薬学科氏名： 竹中 章郎

第1回いわき明星大学FD研修会では、部局間を越えて共通の課題で議論できた。今後の大学改革に向けて、たいへんよい機会であった。大学は新しい世代を育てる使命を帯びている。若い世代にとって常に魅力ある大学でなくてはならない。新しい方向にどんどん進化すべきである。停滞は許されない。研究と教育は一体であり、そこに魅力なくして大学の存続はあり得ない。このような意識を共有できる会合を通じて大学改革の機運が高まることを期待する。

所属： 薬学科氏名： 土原 和子

今回初めていわき明星大学全学でおこなうFD研修会に参加する機会を得た。薬学部以外の先生方はFD研修会そのものが初めてだった方も多かったためか、経験のある薬学部の教員がかなり研修会で表にでていたように感じた。内容は盛りだくさんで、特に午後のグループ討論は十分に討論する時間がとれず、時間におわれてまとめてしまった観があるのは残念である。今後はスケジュールを組む際、もう少し余裕をもってじっくりグループワークを行えるようにしてほしいと思った。

諸星裕先生の基調講演は、なかなか思っても言えないようなこともずばずばとおっしゃい驚いた面もあったが、桜美林大学での抜本的な取り組みを行った話は非常に興味深かった。それと同時に、いわき明星大学にとってのミッション、特性とはなんだろうかと改めて考えるいい機会となった。もちろん諸星先生の話がすべていわき明星大学の実情にあうとは思わないが、この全入時代を生き残るためには、問題が山積しており、それを解決し改革していかねばならないことは確かであろうと考える。

全学でFD研修会をおこなうことは、午前中のような基調講演やレクチャーはいいと思ったが、シラバスを作成したり、問題点を洗い出したりするのは、学部ごとのほうがいいのではないかと思う。それぞれの学部によって目指すところも問題点も違うわけで、輩出する学生に対して身につけてほしいものも異なるはずである。今後は現在のカリキュラムの問題等、実際の学科運営に直接関わるようなテーマで討論に参加するような場があってほしいと思う。

最後にこの会を企画・運営して下さい下さった方々にお礼申し上げます。

所属： 薬学科

氏名： 角 田 大

全教員が参加して行うことで、他学部の先生方の意見等を聞くことができ大変有意義な時間を過ごすことができた。また、短時間で集中して物事を考えることで、大学のこと学生のことなど改めて考え直すよい機会にもなった。

基調講演およびキックオフ・レクチャーでの諸星先生と山崎洋次先生の話聞き、他大学での学生への対応や大学経営の構成の特徴、授業を行う上での留意点などその多種多様性について知り得ることができた。

所属： 薬学科

氏名： 富 岡 節 子

いわき明星大学における第1回FD研修会は、私にとっても第1回のFDであった。ここで、私は教育の場はどのようにあるべきか、また、当大学がどのように進むべきかをしっかりと考える時間を先生方と共にいただいた。大学においては学生も教員も十分な達成感を持てることが理想であり、当たり前のカリキュラムのみならず、独自性を持ったさらなるプラスアルファがあつてしかるべきであろう。また、いわきの地に根付いた、地域性を活かした教育を展開していくべきであり、大きな飛躍の可能性が大であることを実感した。教育と社会を包括して成長させることが今後のいわきの将来を見据えたプランニングと考える。薬学部の私は、まずはいわきの病院・薬局の現状把握と今後のニーズをしるべきであり、そのためにはできるだけ現場に行く機会を見つけ、社会の課題を発見していく所存である。FD研修会によって、最初の目標を見出すことができた。教育について、同じところに立つ教員が一同を会し、意見を出し合うことは、ひとりで思考する何倍もの力となると再確認した。

所属： 薬学科

氏名： 中 越 元 子

諸星先生の基調講演は著書の内容を基本とするものではあつたが、巧みな話術で大学の課題を適切に指摘しており、惹きつけられるものがあつた。

今回のFDは、他学部の教員と交流が持てたことを前向きに評価するが、ワークショップとしては、消化不良の感が強かつた。

FDを進める上で、全体のG10(一般目標)やSBOs(到達目標)が不明瞭であつた。特に課題1では、テーマが漠然としており、討論が未消化なため将来への対応策まで提示させるには、餡の入らない饅頭を作れというようなものではなかろうか。また、課題2は、課題1を積み重ねた上で適切に展開できるテーマかと思われる。このような幅広く、深い課題をワークショップ形式でこなすためには、少なくとも丸2日間は必要であろう。

今回は、本学における初めての全学FD研修会であり、これまで段階的にFDを進めてきた山形大学などの成果をそのままの形で取り入れることは困難である。いわき明星大学のFDの現状を確認して、プログラムを作成する必要がある。まずは「シラバスの意義と作成法」に特化した研修会を実施した方が、短時間でも充実したワークショップになったのではなかろうか。

所属： 薬学科

氏名： 永田 隆之

他の学科の先生方と交流が持てたので大変よかったです。

所属： 薬学科

氏名： 野原 幸男

Cグループでは、本学のおかれている状況を分析し、本学へのニーズとは何かについて討論し、将来への対策案を提案した。グループ討論では、本学のおかれている状況を分析すると、学生数が1学科100人程度であることから、目配りを利かすことができ、きめ細かい指導、対応を行なっていることが本学の長所であるとの意見が出された。一方、コミュニケーションが苦手な学生や精神的に脆弱な学生が多く、就職に苦労しているとの現状を知ることとなり、目的・目標の明確でない学生へのモチベーションの向上と維持が不可欠であるとの認識が得られた。

これらグループ討論で出される各学部からの意見を聞くたび、教員の教育に対する大きな役割を再確認することとなり、更には学生に対する大きな責任を負っていることを強く感じさせられ、今後の教育へのあり方を考えさせられるものであった。このように、グループ討論では、大学へのニーズというものを学生からだけでなく、地域的・社会的ニーズ等を含め、総合的な視点から見て得られた本学の問題点や、長所等の知識と考え方は、今後の教育活動を見つめなおすきっかけとなり得るものであった。一方、各グループの成果物の発表では、本学へのニーズや問題点が更に明らかとなり、その対策方法までの理解が深まった。

この研修を通して、各人が普段考えていることや、そのベースになっている知識を共有することができ、これからの自分の授業並びに教育活動における示唆を十分に得ることができたことは、とても良い経験となった。

所属： 薬学科

氏名： 林 正彦

諸星教授の基調講演は大学運営における問題点の洗い出しという観点から大変参考となった。専門事務の設置と待遇、マネジメント等本学でも取り入れるべき内容が多いことが示されたと思えます。しかしながら、諸星教授の話は文科系学部での場合であり、今後開催するのであれば理科室、医療系のケースでの話ができる方をお招きしていただきたいと思えます。

全体的な流れとしては基調講演、キックオフレクチャー、WS形式のGDという構成になっていますが、中途半端な印象が残りました。WS形式のGDは内容も構成も配布資料も不備な点多という印象を受けたし、それを指導するタスクフォースも練習不足の感があります。他大学の資料や方法を抜粋しただけのFDでは明星大の実態に合わず、真剣な討議にならないと思えます。委員会のご苦労はお察ししますが、今後の参考となれば幸いです。

所属： 薬学科

氏名： 松本 司

少子化ならびに景気低迷の影響による志願者減少は全国の私立大学における共通の問題である。演者である諸星先生の講演の骨子は、「教育改革を怠り、学生が学びがいのある大学と思わなければ、生き残ることができない」というものであると理解した。

午後のグループ討論で与えられた課題は、大学改革、教育改革に直結するテーマであった。まさに今回のFDの目的に即したテーマ選定であったと思う。特に、課題1の「いわき明星大学へのニーズとは何か、その対策は？」は、FDにとどまらず大学全体で時間をかけて討論すべき大きなテーマであると思う。本課題は、大学改革の根幹に位置するテーマではなからうか。是非、しかるべきスタッフで討論していただきたい。

グループ討論は薬学部のFDで数回経験していたが、時間内にまとまった結論に達したことはなかった。そこで、今回の討論では終了時刻を意識して討論に参加したつもりであったが、やはり不十分な討論のまま発表を行わざるを得ない状況であった。残念である。

終了時には疲労感の漂うFDであったが（個人的な感想として非常に疲れた）、それ以上に得るものが多かったと感じている。定員割れに対してただ手をこまねいても現状は改善されない。授業改善を始めとする大学改革の成否が、いわき明星大学の存亡を決めかねないと意を新たにされた次第である。今回のFD実施に尽力された実行委員、ならびにタスクの皆様に感謝する。

所属： 薬学科

氏名： 丸山 博文

研修は、普段あまり交流のない他学部の先生方と共同作業をする機会が与えられ、分野の違う先生と意見交換することができ有意義であった。ただし、与えられたテーマに対しグループ内で議論する時間が短く、もう少し時間的なゆとりが欲しいと感じた（時間制限が逆に効率を高めているのかもしれませんが）。

私の場合、他学部の教育状況について、どの様な方向性を持って行われているのか理解していないのが現状です。今後のFD研修会では、与えられたテーマではなく各学部および大学が抱えている問題等を、教員さらには職員も含め討論する場とすることも必要なことではないかと思う。それらを含め、いわき明星大学で学生は何を学ぶことができるのか、そして何を身に付けられるのか。明確なミッションの構築が必須であり、そのためには大きなエネルギーが必要であると実感した。

所属： 薬学科

氏名： 村田 和子

これまで、他学部の教員と接する機会はほとんど無かったので、全学の教員が一堂に会しての研修会は、学部の垣根を越えて討論することが出来て非常に有意義であった。討論を通しての相互理解はもちろんのこと、他学部の教員の専門知識を直接聞くことが出来、学生の教育ならびに研究の面において相互交流が出来る良いきっかけとなった。さまざまな専門教員がいる総合大学のメリットを教員各人が相互に活用できれば教育・研究の両面においてすばらしい結果につながるのではないかと感じた。また、このような研修会を繰り返し行うことにより、「いわき明星大学のミッション」を教員全員が考える良い機会となり、また、そのことにより教員のモチベーションも上がり、本学のさらなる活性化につながるのではないかと感じた。今回のグループ討論の課題「いわき明星大学へのニーズとは何かそして、その対策は？」は、いわき明星大学のミッションを確認するのに非常にふさわしい課題であったと思う。

また、諸星裕先生の基調講演は本学の教員に重要な示唆を与えてくれたのではないかとと思う。地方の大学であることを短所と考えず、いわき明星大学ならではの長所をもう一度、教職員全員が前向き、かつ挑戦的に考えていくことが必要であることを痛感させられた。このような研修会を機会に、本学の抱えている問題（例：学生数の減少など）の対策について、メール等で教職員が意見を出し合えるコーナーを設置し、多くの声を聴くことも必要なのではないかと感じた。多くの知恵を出し合うことにより、良策が生まれるのではないかとと思う。

加えて、基調講演で諸星先生が話されていた「アドバイザー」制を取り入れて、『学生に対するきめ細かな指導』を本学の特徴の一つに加えるのも良いのではないかとと思う。

所属： 薬学科

氏名： 村田 亮

第1回FD研修に参加して、今までに見えていなかったいわき明星大学像を再確認し、またこれからの教育と研究にそして自分自身を見直す上で貴重な経験をする事ができて感謝をしたいと思います。これからのいわき明星大学を自分自身が教職員と学生とともに築いていくことを自覚し、またチームワークを大切に、学生のことを中心に据えて、地域に根ざした大学を目指すと共に、積極的に外部に大学をアピールして行くことの大切さを再認識しました。今までは学部間の壁があったように思いますが、これからは授業や実習においても学部間の垣根を積極的に取り除き、教職員の交流を深めて、ともに歩むことを自覚して大学の成長に寄与して行きたいと思います。今後とも積極的にFDを開催していただき、教員自身が積極的に切磋琢磨して教育及び研究の内容をお互いに認識し、質の高い、社会のニーズに応えられる学生を養成するための学びの場として欲しいと思います。具体的には、FDにおいて各教員が共通の認識のもとに今までのカリキュラムおよびそのシラバスを見直し、より良い内容を備えたものに改善していく必要があると思います。そしていわき明星大学としての社会的ニーズ、将来への具体的な行動目標を作成して、さらに評価できる体制を整えて行きたいと考えます。そのためにも定期的な全学および各学部での定期的なFDの開催が必須であると思います。

所属： 薬学科

氏名： 山 浦 政 則

本学第1回目のFDとしては、多くの教員が参加し、大抵興味を引かれた様子だったことと、基調講演「消える大学、残る大学」(諸星先生)が、かなりインパクトがあったことなどから、大きな成果があったと感じられる。

諸星先生の話しは、テンポも良く、説得力もあり、迫力がありました。しかし、基本的にはアメリカの学部教育であり、このようにリベラル・アーツ的教育を目指しているのは、日本ではICUと桜美林大学位ではないでしょうか。とにかく、いわき明星大学では、従来の日本型の教育で行くのか、前二校のようにリベラル・アーツ的教育方針で行くのか、決断しなければならない局面だと思えます。ポイントは、先生方の希望ではなく、地元の高校生や親に、しっかり理解され、受け入れられることが最優先でしょう。大学の方向性、すなわち、地域住民に、説得力のある具体的な教育目標を示し、実践することが急務だと思われます。

キックオフ・レクチャー1:「医療系教育におけるカリキュラム立案法の紹介」;山崎 洋次 先生(薬学部長)で、シラバスの基本的な概念と役割が、分かり易く解説された。

キックオフ・レクチャー2:「シラバスの意義と作成法」(諸星 裕 先生)は、シラバスを作成する際の、具体的なポイントをいくつか指摘された。何れも、本学のシラバスを再点検する上で、効果が反映されるものと期待している。

一方、SGD(スモールグループディスカッション)は、最初は各先生方の口数も多くはなかったが、しばらくすると活発な議論が始まり、すばらしい盛り上がりだったと思えます。

今回は、第1回目ですが、回を重ねて、このようなFDで、我々が具体的に直面している個々の問題点を取り上げて行けば、さらに有意義だと思えます。

所属： 薬学科

氏名： 山 崎 直 毅

全学初めてのFDということで、いわば全体の肩慣らしという意味では実り多かったと思えます。一方、薬学部ではすでに3回のFDを行っており、その経験から他学部の先生方はSGDにおける技術的な情報不足に完成度の高いものを求めた場合に苦慮されたのではないかと推察いたします。例えばシラバス作成におけるGIOやSBOについて言葉の使い方とか、評価法に関しては本来ならばもっと時間をとって講義する必要があるように思いました。

基調講演では「世界基準」のGPAについて興味深く拝聴しました。ただし薬や理系科目には Semesterで収まらない学問領域や、単位制に馴染まない進め方や積み上げを行っている分野があると思えます。これをGPAではどのように工夫しているのか、あるいはそのようなもの(馴染まないもの)はそもそも存在しないのか、失敗例を含めて例示して戴けると素直に聴けたと思えます。

今後FDのありかたを全学部分と各学部の部分に切り分け、「又、同じか!」とならないように、又ワークショップの場合テーマを絞り込むことでSGDに時間を十分かけるように日程調整して貰えれば満足感が得られると思えます。あるいは学生にマッチした講義のためには「学部制で学生を縛るな」ということですから、現在薬学部で先行しているFDは発展的、横断的に解消して全学FDとして継続してゆくことも一案かと存じます。

所属： 薬学科

氏名： 山崎 洋次

「教えることができるとは、なんという特権でしょう。教えるために必要な知識を持つ多くの人たちの中で、将来にわたってずっと心に残るような方法で、また同時に関心をそそるような方法で、学生にそれを教えられる人は何と少ないでしょう」、この言葉は世界的にも有名なメイヨー・クリニックの創設者の一人であるチャールズ・メイヨーの1928年の論文集の中の“Educational Development of Man”からの引用である。一世紀ほど前にチャールズ・メイヨーが述べた言葉は、現在でも教員であるわれわれに自戒と努力を求めている。解かってはいるが、できないところが凡人には辛いところだ。FDが必要な理由もここにある。

諸星先生の基調講演も新鮮、強烈であった。本学が何を指すのか、何を指さなければならないのか、いくつかの重要な指摘（ヒント）があった。とくに職員の在り方については、目から鱗が落ちる思いであった。GPA制度の導入も、社会情勢を考えると必至であろう（大学基準協会は判定資料として重視するだろう）。

さて、今回のFDのようにワークショップを実施する適正な人数の上限は100名程度と考えると、全学の教員が一堂に会してワークショップを規模の大きな大学では実施できない。本学は幸い実施可能な範囲にあるが、2回目以降は人数を絞り込んでもいいのではないだろうか。FDは継続が重要である。適当なエネルギーを不断に注入することが、FDの効果を発揮するものと考えられる。ともかく、繁忙の中、研修会をご準備いただいた関係者の皆様に感謝する次第である。

所属： 薬学科

氏名： 吉川 真一

昨年3月まで大学教育とは無縁だった私にとって、大学での教育のあり方、教員のあり方、地域における大学のスタンス等、基調講演での諸星先生の話の内容がとても新鮮に響いてきました。SGDでも「いわき明星大学へのニーズとは何かそして、その対策は」というテーマに、各学部の先生方それぞれの立場から、現状抱えている問題点を出し合い意見の交換をすることができ、非常に有意義な時間を持つことができました。

今回の研修会を企画くださった方々に感謝申し上げます。

所属： 薬学科

氏名： 吉田 君成

諸星 裕 氏による講演「我が国の大学の致命的欠陥」の内容には、学び取るべきことが多くあったと思います。特に同氏の米国大学勤務時の経験談は興味深く、日米の大学の様々な違いを通して日本の大学の問題点を認識する助けになりました。

この中でも最も印象に残ったのは、米国の一般教養の教育に重点を置く大学の教育体制についての話でした。この全てをそのまま本学に導入しても意味の無い事と思われそうですが、それでも大変参考になりました。

例えば、授業に対する学生の苦情・評価・提案などを集め、これをしっかりと教員に伝える事に力を注いでいる点には特に感心しました。これに比べて日本では、学生の声を集める事はよく行われているのですが、そうして集めた学生の声を教員に伝える工程に弱さがあるように思います。

グループディスカッションでは、題を「いわき明星大学へのニーズとは何かそして、その対策は？」として討論を行いました。ここでは、人文学部、科学技術学部の教員ならではの発想・意見があり、とても勉強になりました。薬学部内でのFD研修会がこれまでに数回行われていましたが、このときに行われた討論では聞かれなかった考え方に今回は触れる事ができました。

これらのことから、今回の全学でのFD研修会は私にとって大変有意義でした。

所属： 薬学科

氏名： 吉田 進

9月から勤務したばかりで、学内のことが何も分からない状態でのFD研修会参加でしたが、基調講演の諸星 裕先生の講演は興味ある内容で、教員の責務については新たに教員になった私にとって大変参考になるものでした。カリキュラム・シラバスの作成についても、次年度からのシラバスの作成に役立てることができるもので大変ありがたく拝聴いたしました。

また、グループの課題では他学部の先生方と協力しながらのシラバス作成は貴重な体験でありました。

10. アンケート結果

I. 質問項目

・所属学部にチェック（レ印）してください。

科学技術学部

人文学部

薬学部

1 この研修会には、積極的に参加しましたか。○で囲んでください。

①とても消極的	②やや消極的	③なんとなく	④やや積極的	⑤とても積極的
---------	--------	--------	--------	---------

2 研修会が終了した現在、参加して良かったと思っていますか。○で囲んでください。

①とても悪かった	②悪かった	③普通	④良かった	⑤とても良かった
----------	-------	-----	-------	----------

3 今回の研修会における次の各項目について、個人的な収穫度（意欲，理解，応用など）を5段階で評価し，○で囲んでください。

	悪い ←				→ 良い
(1) 教育全般	1	2	3	4	5
(2) いわき明星大学に対する主体的な参画意識	1	2	3	4	5
(3) いわき明星大学における教育環境の把握	1	2	3	4	5
(4) 基調講演：「わが国の大学の致命的欠陥」	1	2	3	4	5
(5) キックオフ・レクチャー1：「医療系教育におけるカリキュラム立案法の紹介」	1	2	3	4	5
(6) キックオフ・レクチャー2：「シラバスの意義と作成法」	1	2	3	4	5
(7) グループ討論	1	2	3	4	5
(8) 参加者の相互合流	1	2	3	4	5

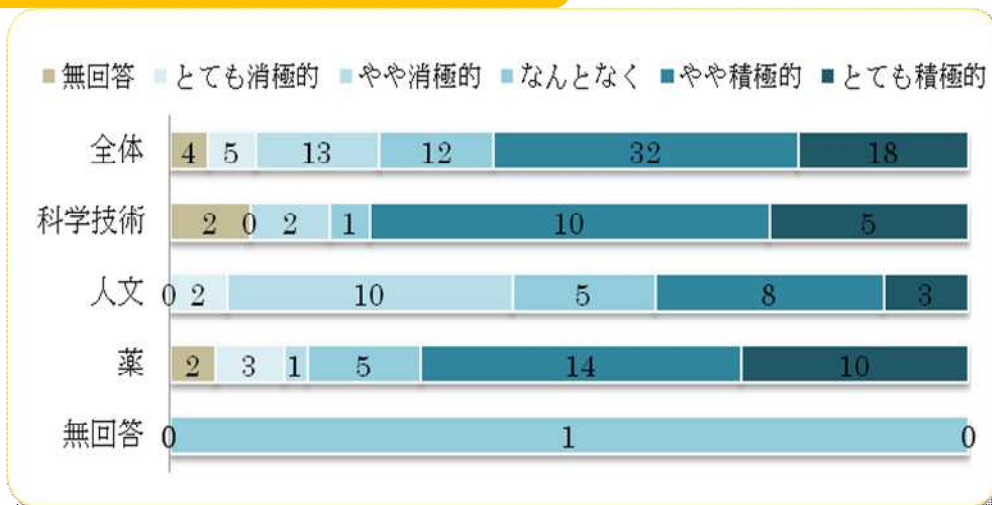
4 今回の研修会を5段階で評価し，○で囲んでください。

(1) プログラムの内容の選択はいかがでしたか。	1	2	3	4	5
(2) 内容に対する時間配分はいかがでしたか。	1	2	3	4	5
(3) 内容の難易はどうでしたか。（1：簡単・・・5：難しい）	1	2	3	4	5
(4) この研修会の成果を，これからのあなたの教育活動に活かそうと思いますか。	1	2	3	4	5
(5) 今回の研修会の開催時期はいかがでしたか。1または2に○を付けた方は，下記の欄に御希望の時期を具体的に記入してください。 ※御希望の時期 [月 旬頃]	1	2	3	4	5
(6) 今回の研修会の企画・運営を総合的に評価してください。	1	2	3	4	5
(7) 今回の研修会全体を総合的に評価してください。	1	2	3	4	5

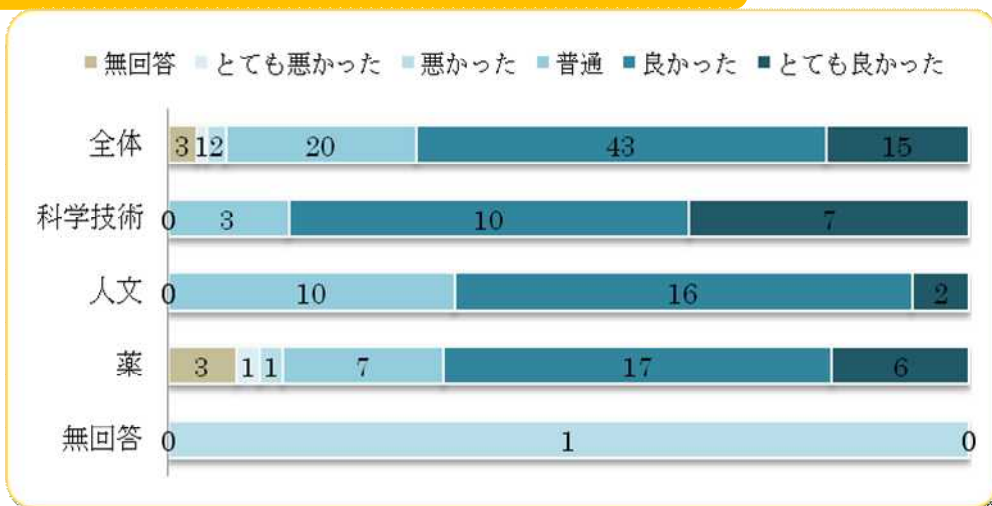
以上

II. 集計結果

Q1. この研修には、積極的に参加しましたか。

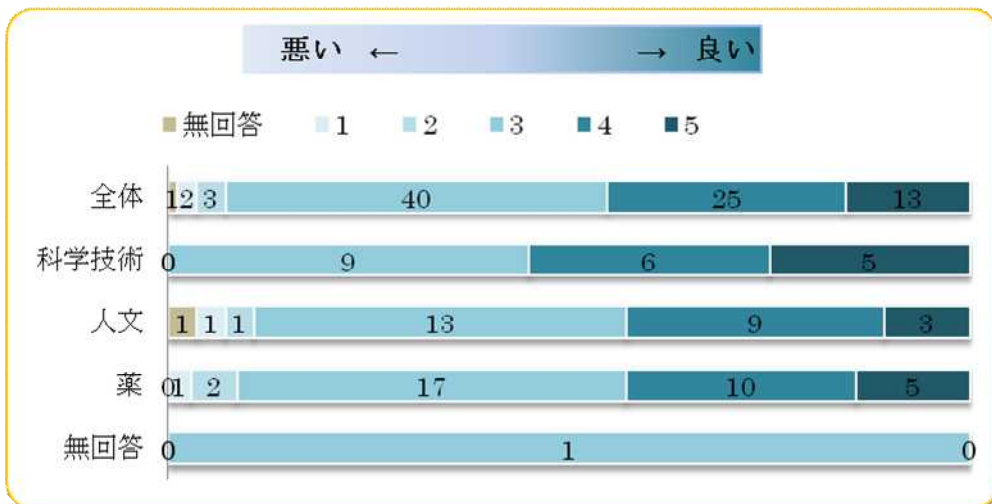


Q2. 研修会が終了した現在、参加して良かったと思いますか。

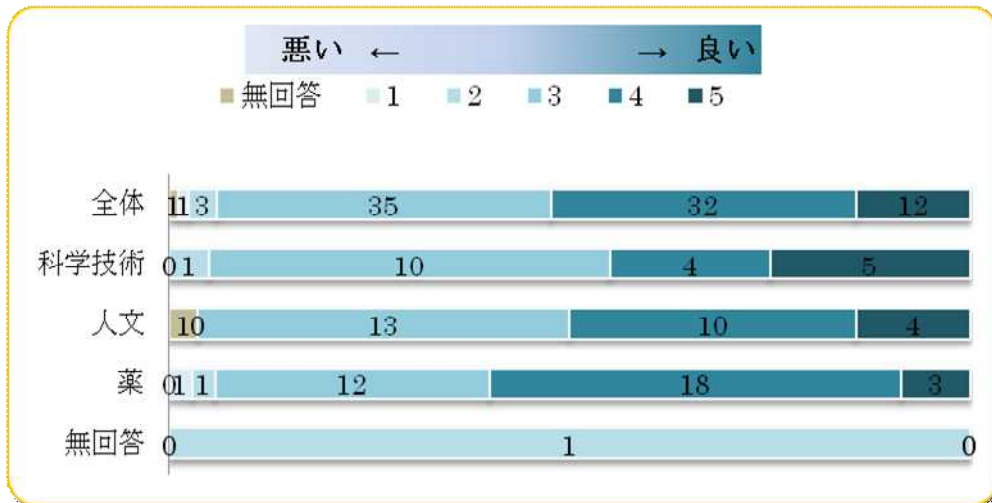


Q3. この研修会での個人での収穫度について

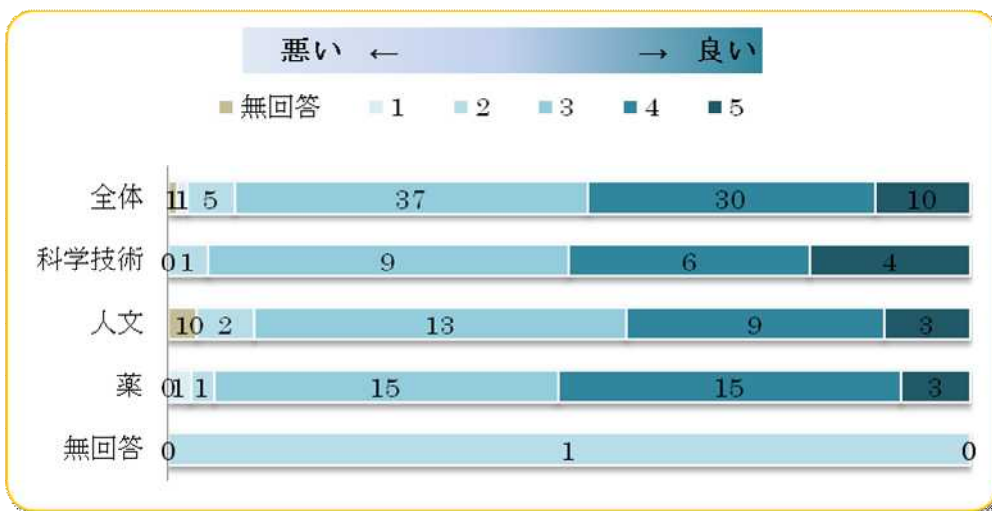
(1) 教育全般



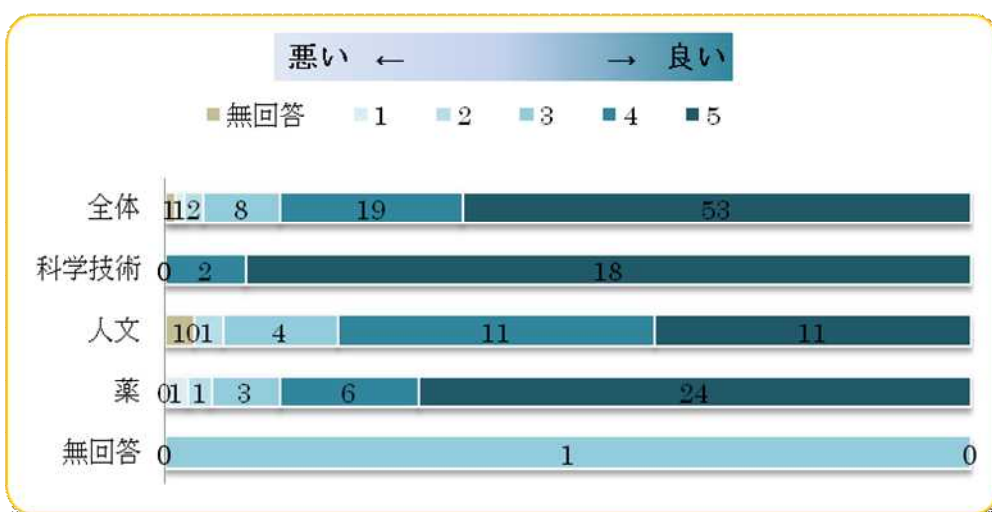
(2) 主観的な参画意識



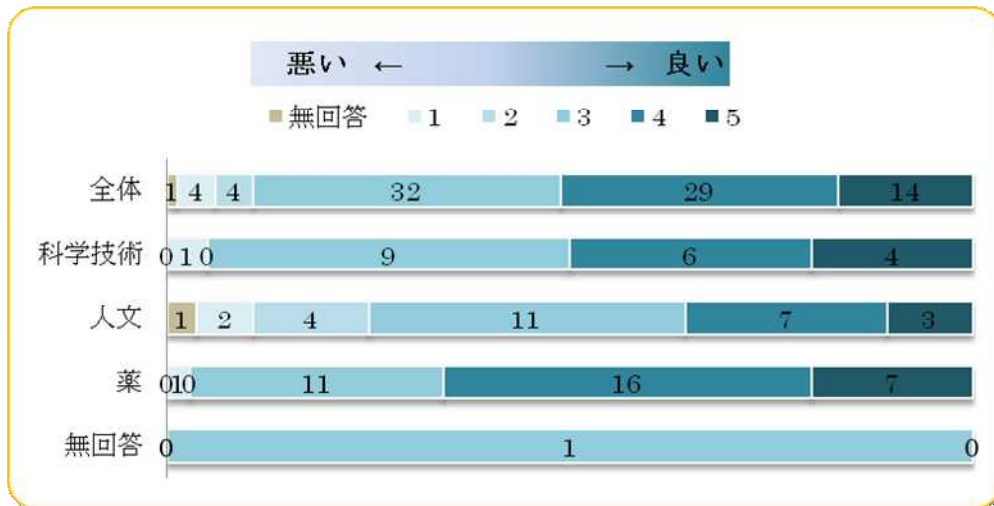
(3) 教育環境の把握



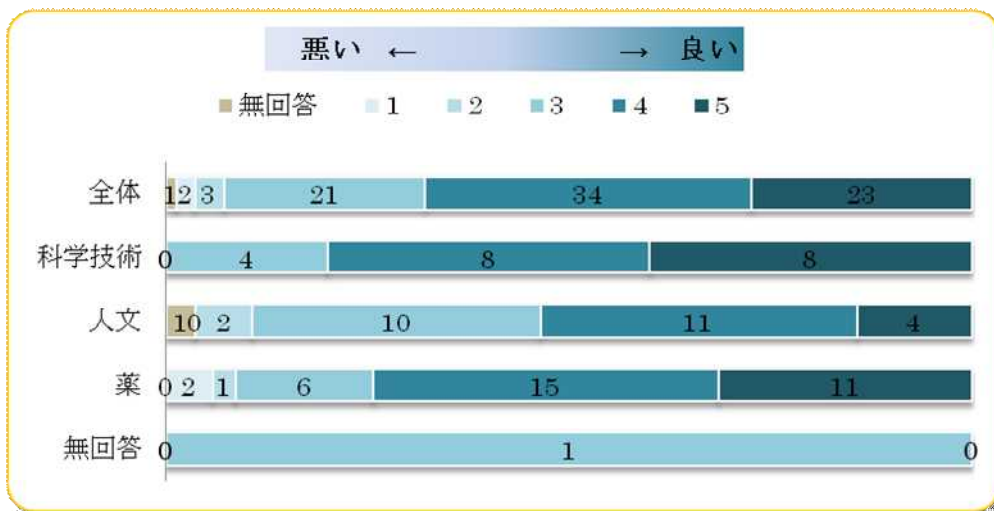
(4) 基調講演



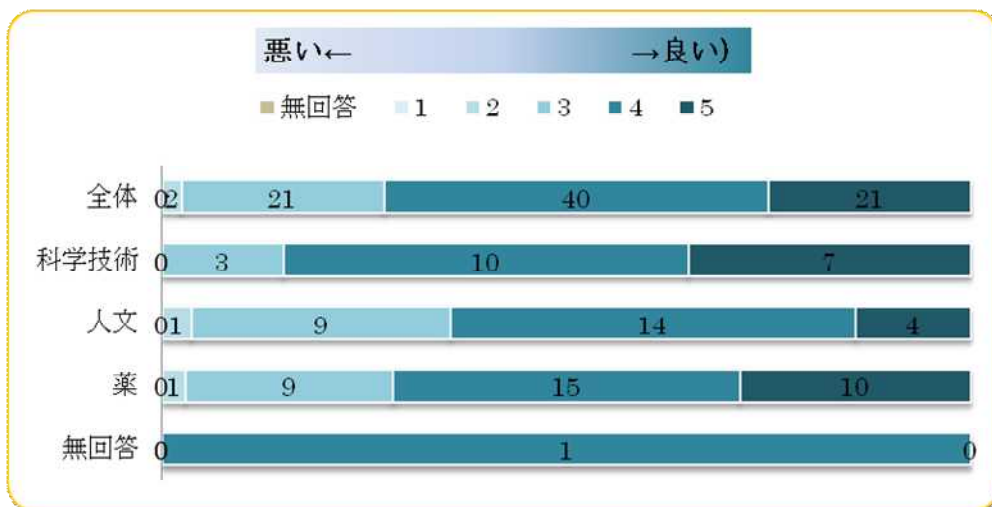
(5) キックオフ・レクチャー1



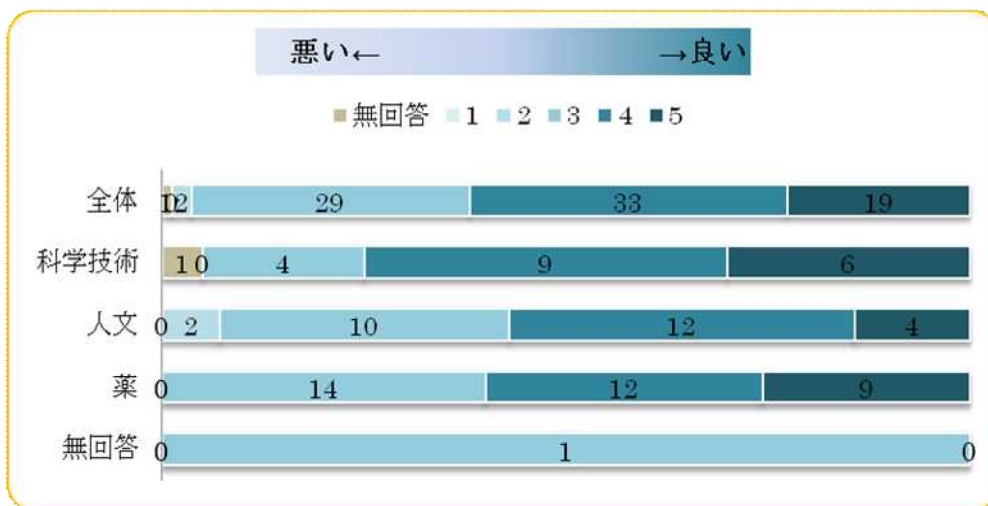
(6) キックオフ・レクチャー2



(7) グループ討論



(8) 相互交流

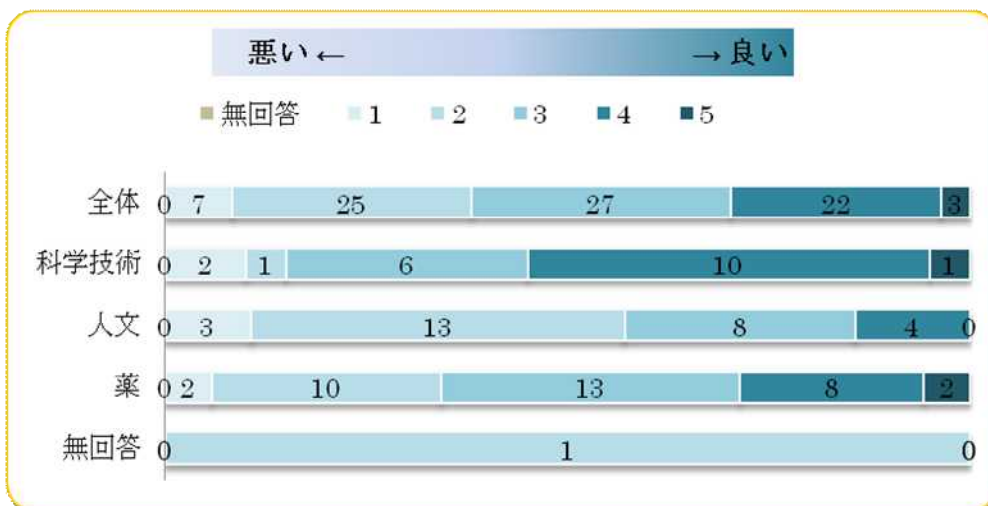


Q4. 研修会評価

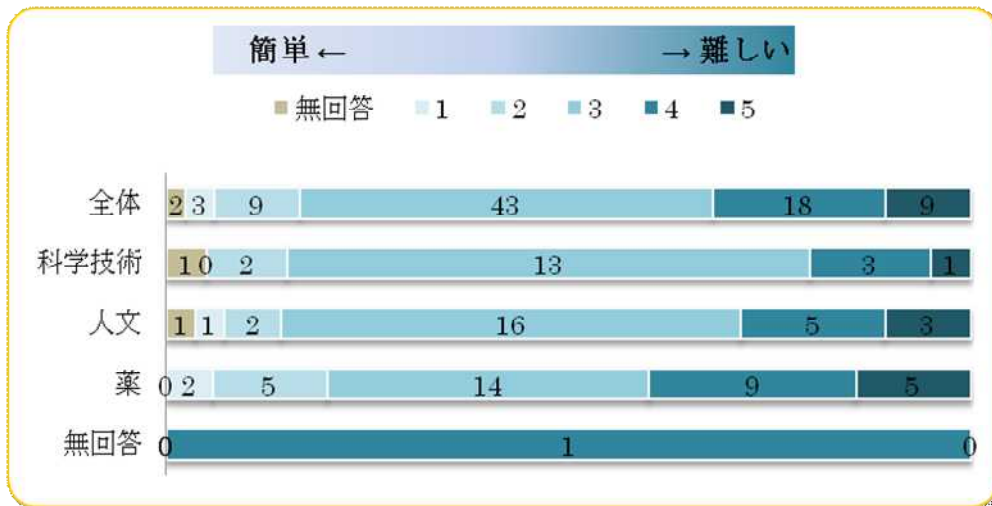
(1) プログラム



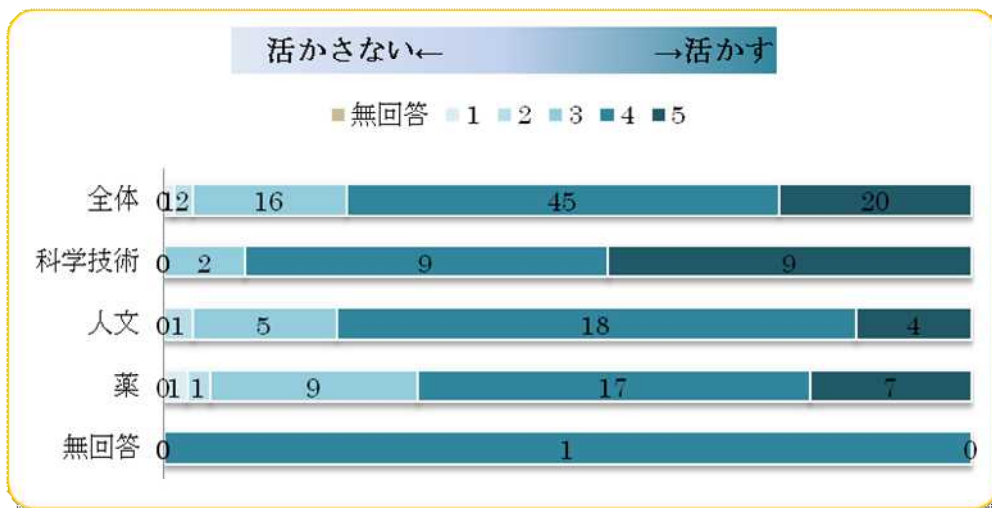
(2) 時間配分



(3) 内容の難易度



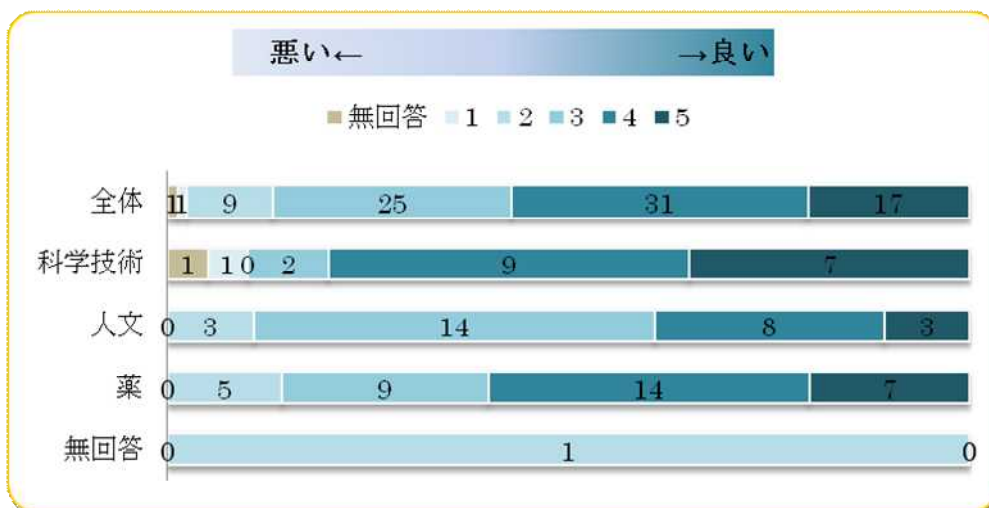
(4) これからの教育へ活かすか



(5) 開催時期



(6) 企画・運営の総合評価



(7) 全体総合評価



11. 懇親会

研修会終了後に開催された懇親会では、基調講演をしていただいた諸星裕先生もご出席され、和やかな雰囲気の中にも活発な議論が交わされました。

お忙しい中、快くご講演をお引き受け下さった諸星先生に、改めて御礼申し上げます。

